

元総社蒼海遺跡群(137)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2020.3

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群(137)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 0 . 3

前橋市教育委員会



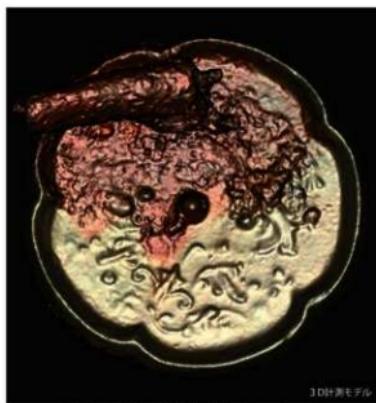
元總社舊海道跡群（137）1区全景 （上が北）



元總社舊海道跡群（137）2区遠景 （南東から）



2区H-26号住居跡出土遺物（H-26-1）



2区D-8号土坑出土遺物（D-8-1）

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中核として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王廃寺、國府、國分僧寺、國分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、諸代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた肥橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元總社蒼海遺跡群（137）は古代上野国の中核地域の調査であり、上野國府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めています。今回の調査では、國府そのものに関連する遺構の検出、確認はかないませんでしたが、古墳時代から古代の多数の住居跡や中世の堀跡等が検出されました。また、八稜鏡等の鏡も出土しています。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和2年3月

前橋市教育委員会

教育長 塩崎政江

例　　言

1 本報告書は前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（137）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査の要項は次の通りである。

遺跡名	元総社蒼海遺跡群（137）
調査場所	前橋市元総社町 1986 ほか
遺跡コード	IA 246
監理指導	並木史一（前橋市教育委員会）
発掘・整理担当者	山田誠司（技研コンサル株式会社）
調査員	茂木佑輔（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	令和元年 12月 5日～令和2年 2月 13日
整理・報告書作成期間	令和2年 2月 1日～令和2年 3月 27日

3 本書の編集は山田が行い、原稿執筆は I を並木、他を山田が担当した。

4 発掘調査および整理作業参加者は次の通りである。

大川明子（技研コンサル株式会社）
青木美好 芦川良紀 新井 實 安藤三枝子 伊丹茂一 稲敷美枝子 稲田 實 上沢公一 上田健一郎
宇賀神光 宇賀美代子 大塚とし子 岡 真 小川弘之 笠原たく江 菊田武明 北爪二郎 小池初美
後藤次雄 小林克宏 小林 和 佐藤秀幸 佐藤文江 塩野谷和夫 設樂和男 清水隆二 杉田安廣
杉田友香 須田一雄 須田勝美 関根信子 高津邦道 高橋一巳 高橋正志 高見壽美子 立川千栄子
田所順子 富澤 博 中嶋知恵子 長野利章 二木純夫 西湯 登 乘附敏男 福島祿子 二ツ橋正雄
星野正也 細野竹美 真下かほる 増田 静 水野さかあ 森田恵子 山口晶久

6 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。

7 下記の機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 山下工業株式会社

凡　　例

1 挿図中に使用した北は座標北である。

2 插図に国土地理院発行 1/200,000 「宇都宮」「長野」、1/25,000 「前橋」、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。

3 遺構名称は、堅穴住居跡：H、堅穴状遺構：T、溝跡：W、井戸：I、土坑：D、ピット：Pである。

4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次の通りである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構 全体図・・・1/300 住居跡・・・溝跡・井戸跡・土坑・ピットほか・・・1/30、1/60

遺物 土器・陶器・・・1/3、1/4 鉄・銅・石製品・・・1/1、1/6 古銭・・・1/1

5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。

6 遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。

遺構 灰・焼土範囲：■ 遺物 須恵器（還元焰）：■ 施釉：■

7 主な火山降下物等の略称と年代は次の通りである。

As-B（浅間 B 軽石：1108）、Hr-FP（榛名二ヶ岳伊香保テフラ：6世紀中葉）、

Hr-FA（榛名二ヶ岳渋川テフラ：6世紀初頭）、As-C（浅間 C 軽石：3世紀後葉～4世紀前半）

目 次

卷頭図版 1	
卷頭図版 2	
はじめに	
例言・凡例	
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査の方針と経過	
1 調査範囲と基本方針	8
2 調査経過	8
IV 基本層序	8
V 遺構と遺物	
1 1区	
(1) 堪穴住居跡	9
(2) 溝跡	10
(3) 井戸跡・土坑・ピット	10
2 2区	
(1) 堪穴住居跡	21
(2) 堪穴状遺構	28
(3) 溝跡	28
(4) 井戸跡・土坑・ピット	29
VI まとめ	48

挿図目次

Fig. 1 遺跡の位置	1	Fig. 18 2区 H-11・12号住居跡、D-1号土坑	34
Fig. 2 前橋の地形	2	Fig. 19 2区 H-13・15~17号住居跡	35
Fig. 3 周辺遺跡図	3	Fig. 20 2区 H-18~22号住居跡、T-1号堪穴状遺構、	
Fig. 4 周辺調査地点とグリッド設定図	7	W-2号溝跡、I-1号井戸跡	36
Fig. 5 基本層序	8	Fig. 21 2区 H-23~25号住居跡、W-3号溝跡、	
Fig. 6 1区 全体図	12	D-4号土坑	37
Fig. 7 1区 H-1・2号住居跡	13	Fig. 22 2区 H-25・26・28・31・35~37号住居跡、	
Fig. 8 1区 H-3~6号住居跡、D-4号土坑	14	D-2・3・5・6号土坑、P-3号ピット	38
Fig. 9 1区 H-4・5号住居跡カマド、H-7・8号住居跡、D-10・11号土坑、P-2号ピット	15	Fig. 23 2区 H-27号住居跡	39
Fig. 10 1区 W-1号溝跡、井戸跡、土坑(1)	16	Fig. 24 2区 H-29・30・32~34号住居跡、D-7~9号土坑、P-2・4・5号ピット	40
Fig. 11 1区 土坑(2)、ピット	17	Fig. 25 2区 W-1・4・5号溝跡	
Fig. 12 1区 出土遺物(1)	18	2区出土遺物(1)	41
Fig. 13 1区 出土遺物(2)	19	Fig. 26 2区出土遺物(2)	42
Fig. 14 2区 全体図	30	Fig. 27 2区出土遺物(3)	43
Fig. 15 2区 H-1~4号住居跡	31	Fig. 28 2区出土遺物(4)	44
Fig. 16 2区 H-5~7号住居跡	32	Fig. 29 2区出土遺物(5)	45
Fig. 17 2区 H-8~10・14号住居跡、P-1号ピット	33		

表目次

Tab. 1	周辺遺跡一覧表	4	Tab. 4	2区井戸跡・土坑・ピット計測表	29
Tab. 2	1区井戸跡・土坑・ピット計測表	11	Tab. 5	2区出土遺物観察表	46
Tab. 3	1区出土遺物観察表	20			

写真図版目次

PL. 1	1区 H - 1号住居跡全景 (北から) 1区 H - 2号住居跡全景 (西から) 1区 H - 2号住居跡遺物出土状況 (北西から) 1区 H - 2号住居跡遺物出土状況 (西から) 1区 H - 2号住居跡遺物出土状況 (北から)	PL. 7	2区 H - 23号住居跡歯骨検出状況 (南から) 2区 H - 24号住居跡、W - 3号溝跡全景 (南から) 2区 H - 25号住居跡全景 (東から) 2区 H - 25号住居跡カマド全景 (東から) 2区 H - 26号住居跡全景 (西から)
PL. 2	1区 H - 5号住居跡カマド全景 (東から) 1区 H - 7号住居跡、D - 10・11号土坑全景 (南から) 1区 H - 8号住居跡、W - 1号溝跡全景 (南西から) 1区 I - 1号井戸跡全景 (南から) 1区 基本層序 A (東から) 1区 基本層序 B (東から) 1区 基本層序 C (南から) 1区 基本層序 D (東から)	PL. 8	2区 H - 28号住居跡全景 (西から) 2区 H - 30～37号住居跡全景 (南西から) 2区 W - 1号溝跡全景 (南西から) 2区 D - 8号土坑全景 (西から) 2区 D - 8号土坑銅鏡出土状況 (西から) 2区 D - 8号土坑鉄鎧出土状況 (西から)
PL. 3	2区 調査区全景 (上が北) 2区 H - 1号住居跡全景 (南から) 2区 H - 1号住居跡覆土堆積状況 (南西から) 2区 H - 2号住居跡全景 (北から) 2区 H - 3号住居跡全景 (西から)	PL. 9	2区 基本層序 A (南から) 2区 基本層序 B (西から) 2区 基本層序 C (西から) 2区 基本層序 D (東から) 2区 出土遺物
PL. 4	2区 H - 4号住居跡全景 (西から) 2区 H - 5・6号住居跡全景 (西から) 2区 H - 7号住居跡全景 (西から) 2区 H - 7号住居跡カマド全景 (北西から) 2区 H - 8号住居跡、P - 1号ピット全景 (西から) 2区 H - 9号住居跡全景 (西から) 2区 H - 10号住居跡全景 (西から) 2区 H - 10号住居跡カマド全景 (西から)	PL. 10 PL. 11 PL. 12 PL. 13	出土遺物 出土遺物 出土遺物 出土遺物
PL. 5	2区 H - 11号住居跡、D - 1号土坑全景 (北西から) 2区 H - 11号住居跡カマド全景 (西から) 2区 H - 12号住居跡全景 (西から) 2区 H - 12号住居跡カマド全景 (西から) 2区 H - 13・14号住居跡全景 (南西から) 2区 H - 13号住居跡カマド全景 (西から) 2区 H - 15・16号住居跡全景 (南から) 2区 H - 17号住居跡 (南西から)		主要な参考文献 群馬県教育委員会・財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 『鳥羽遺跡 G・H・I区』 群馬県教育委員会・財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990 『鳥羽遺跡 L・M・N・O区』 群馬県教育委員会・財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993 『元経社寺田遺跡I』 前橋市教育委員会 2008 『天神III遺跡』 前橋市教育委員会 2019 『元経社舊海遺跡群 (II)』・(123)』
PL. 6	2区 H - 18～21号住居跡、W - 2号溝跡全景 (南西から) 2区 H - 22号住居跡、T-1号壺穴状遺構全景 (南から) 2区 H - 22号住居跡遺物出土状況 (北西から) 2区 H - 23号住居跡全景 (西から)		

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海地区画整理事業に伴い実施され、21年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

令和元年8月26日付で前橋市長 山本 龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）より試掘確認調査依頼が提出された。これを受け、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）で同年9月18・19日に試掘確認調査を実施した結果、遺構が検出され、工事計画から遺構の現状保存は困難であると判断したため、記録保存を目的とした発掘調査実施に向けて協議を進めた。

令和元年10月15日付で前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、市教委に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年11月26日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群（137）」（遺跡コード：1A246）の「元総社蒼海」は土地地区画整理事業名を採用し、「（137）」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。

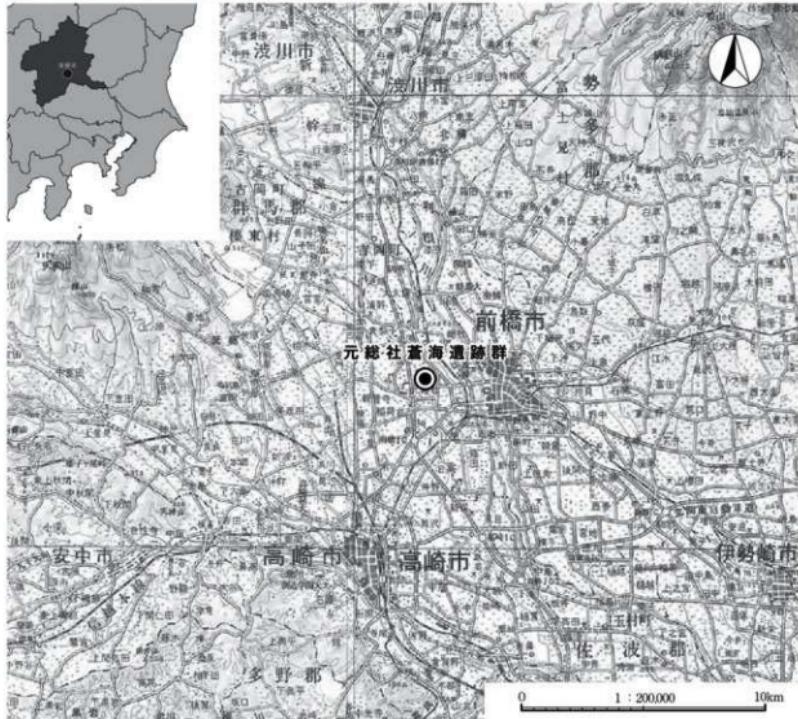


Fig.1 遺跡の位置

II 遺跡の位置と環境

地理的環境 (Fig. 1) 元総社蒼海遺跡群 (137) は、前橋市街地から利根川を隔て西へ約 3.6km の地点、前橋市元総社町地内に所在する。遺跡地の西側には関越自動車道が南北に、南側には国道 17 号、主要地方道の県道足門・前橋線、前橋・安中・富岡線が東西に、また東側には市道大友・石倉線が南北にそれぞれ走っている。

遺跡は榛名山山麓の相馬ヶ原扇状地端部と前橋台地との移行地帯に立地する。遺跡周辺には、相馬ヶ原扇状地の伏流水を水源とする牛池川、染谷川が流れている。これらの河川の開析作用によって細長い微高地と低地が多く形成されており、その比高差は 3~5m を測る。遺跡が立地する周辺は主に畑地として利用されていたが、前橋市中心部から続く市街地の西端にあたり、近年では元総社蒼海地区画整理事業の進展によって宅地や商業施設が立ち並び、市街地化が拡大している。

歴史的環境 (Fig. 3 · Tab. 1) 本遺跡が所在する元総社地域は、上野国府推定地や上野国分寺・国分尼寺を中心に連続と遺跡が広がる地域であり、関越自動車道建設や区画整理事業などに伴う発掘調査が行われ、多くの遺構が確認されている。本遺跡周辺地域での時代毎の遺跡の概要是以下の通りである。

(1) 織文時代 八幡川右岸の微高地上に産業道路東 [15] 、産業道路西 [16] 、本遺跡の立地する牛池川右岸台地上に上野国分僧寺・尼寺中間地域 [22] 、元総社小見三遺跡 [59] 、元総社蒼海遺跡群 (24) などが挙げられ、竪穴住居跡が確認されている。本遺跡でも織文時代前期から中期にかけての遺構を確認している。

(2) 弥生時代 日高遺跡 [18] [19] 、上野国分僧寺尼寺中間地域 [22] 、正観寺遺跡 [21] などがあるが、その分布は散在的である。この内、日高遺跡では浅間 C 軽石下の水田跡が確認されており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続して営まれた水田と捉えられている。

(3) 古墳時代 本遺跡周辺は県内でも有数の古墳密集地域であり、それを代表するものとして總社古墳群が挙げられる。古墳時代後期・終末期に亘り、王山古墳 [7] 、總社二子山古墳 [12] 、愛宕山古墳 [10] 、宝塔山古墳 [13] 、蛇穴山古墳 [8] などの首長墓が多数築造された。また、この時期には山王庵寺 [4] が建立され、總社古墳群を含め、政治的中枢地域となる。

山王庵寺は昭和 3 年に日枝神社境内が「山王塔址」として国指定史跡となり、その後昭和 49 ~ 56 年にかけて 7 次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査で金堂の検出および「放光寺」梵書の平瓦出土により山王庵寺が「山ノ上碑」「上野国交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。平成 9 ~ 11 年の調査でも土坑から大量の塑像が出土し、平成 18 ~ 19 年度調査では北・東・西面、平成 20 年度調査では南面の回廊を検出している。さらに平成 21 年度調査では「推定中門」と「西側南側回廊」の周辺部が、平成 22 年度調査では北西隅の回廊と接するように「基壇建物跡」と「北方建物群」が確認されている。なお、この寺の塔心礎や石製鷲尾、根巻石等の石造物群は宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術に



Fig.2 前橋の地形

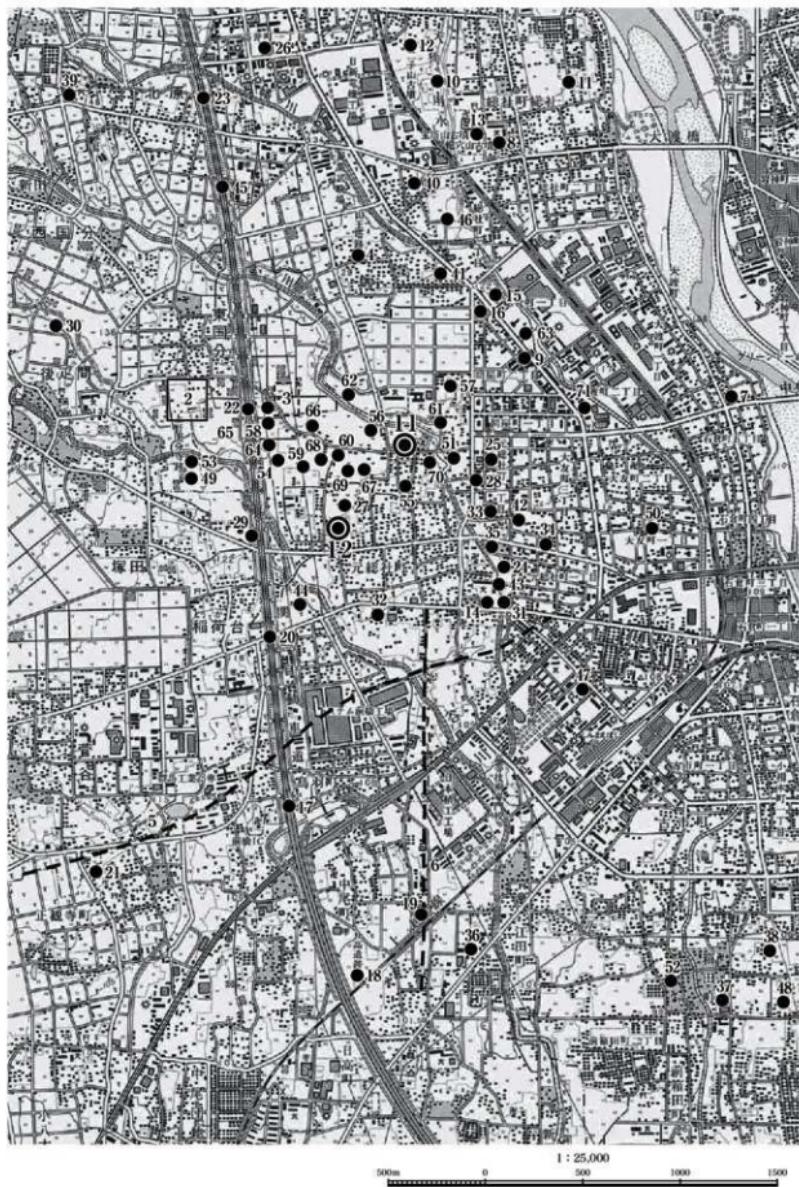


Fig. 3 周辺遺跡図

よるものと考えられており、仏教文化と古墳文化とが併存しながら機能していた様子が窺える。

この時代の集落は牛池川と染谷川に挟まれた台地上に展開しているが、前期～中期の集落は散見される程度で、後期からの集落増加が看取できる。生産域としては、牛池川左岸一帯に広がる低地平野において、元総社明神遺跡、元総社北川遺跡、總社閑泉明神北^{IV}、V 遺跡などで水田跡が確認されている。

(4) 奈良・平安時代 奈良時代には上野国府が造営され、上野国分寺〔2〕・国分尼寺〔3〕の建立に示されるように、本遺跡周辺は古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は本遺跡付近の区域に約 900m 四方に推定され、関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡〔14〕では県下最大級の掘立柱建物跡が検出され、元総社蒼海遺跡群（99）、上野国府等範囲内確認調査 28・33・34 トレンチでは掘込地業を持つ建物跡が、元総社蒼海遺跡群（95）では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。元総社寺田遺跡〔43〕では「國府」・「曹司」・「國」・「邑尉」などの墨書き土器や人形^{リリゲ}が出土している。元総社明神遺跡〔24〕では南北方向の溝跡、閑泉橈遺跡〔25〕や元総社蒼海遺跡群（7）・（9）・（10）では東西方向の溝跡が確認され、国府城の外郭線の想定が為されている。また、周辺遺跡からは円面鏡や綠釉陶器、巡方（腰帶具）なども出土しており、国府を考える上で貴重な資料となっている。

国分僧寺は大正 15 年に国指定史跡となり、昭和 40 年代から部分的な発掘調査が進められるようになった。昭和 55 年以降には本格的な調査が始まり、主要伽藍の礎石・塼垣・堀等が確認されている。また、平成 24 年度から 28 年度にかけての第 2 期発掘調査において、これまでの金堂が講堂であったことが判明する等、伽藍配置の変更が行われている。国分尼寺は昭和 44・45 年のトレンチ調査により伽藍配置が推定され、その後平成 12 年度に前橋市埋蔵文化財発掘調査團により南東での寺域確認調査が行われた。調査の結果、南東・南西隅の築垣と、それに平行する溝跡や道路状遺構等が確認されている。また、高崎市教育委員会による平成 28 年度の調査で講堂跡が尼坊跡であったことが判明し、平成 29 年度の調査では回廊跡の一部が確認されている。関連遺跡としては鳥羽遺跡〔20〕で神社遺構と工房跡が確認され、上野国分僧寺・尼寺中間地域〔22〕では大規模な集落・掘立柱建物跡群が検出されている。また、近郊には N・64°・E 方向に東山道（国府ルート）が、日高遺跡〔19〕では幅約 4.5m の推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。

当該期の一般的な集落は、古墳時代と同様に牛池川と染谷川に挟まれた台地上に立地するが、国府推定域の中心部での分布は少なく、国府城と居住域の区分けが看取できる。近年の調査による元総社蒼海遺跡群（40）で 8 世紀後半の住居跡内の一角に鍛冶遺構が検出されている。元総社蒼海遺跡群（41）では 9 世紀後半の鍛冶工房が検出され、同遺跡からは金の付着した灰釉陶器や奈良三彩といった貴重な遺物が出土している。また、元総社蒼海遺跡群（64）では 8 世紀前半には廃絶されたと考えられる製鉄炉跡（箱型炉）が 1 基、元総社稻葉遺跡〔47〕では 10 世紀に想定される製鉄炉跡（小型自立炉）が 2 基確認されている。

(5) 中世 室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海城を本拠地としこの地を治めた。元総社蒼海遺跡群では蒼海城の堀跡が多く検出されており、12～15 世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺、袴腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。天正年間以降は源氏・秋元氏が蒼海城に入り当地の領主となるが、慶長 6 年（1601 年）に秋元長朝が總社城に移ると同時に蒼海城は廃城となった。また、当該期の周辺遺跡では大渡道遺跡〔71〕の貨幣理納遺構から 572 枚におよぶ銭貨が捲紐を通した「縛」の状態で六縄出土している。

Tab.1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	元総社蒼海遺跡群（137）	11	曳出山跡	21	正岡今造跡 I - Ⅲ	31	今井作跡
2	上野国分寺跡	12	越前二山古墳	22	上野国分寺跡・尼寺中間地	32	大沢作跡
3	上野国分尼寺跡	13	安原古墳	23	正岡作跡	33	別動作跡
4	山川塙跡	14	火薙町小学校前遺跡	24	正岡明神遺跡 I - Ⅲ	34	早瀬作跡
5	朝日塙（確定）	15	東武志山根遺跡	25	閑泉作跡	35	人丸屋敷 I・茎葉跡
6	日高塙（確定）	16	東武志山根西巷跡	26	丸丸作跡 I・Ⅲ	36	伊八作跡
7	山古墳	17	中岡遺跡	27	豊津作跡	37	村前作跡
8	船六山古墳	18	日高遺跡	28	閑泉作跡	38	五反川作跡
9	福島山古墳	19	日高遺跡	29	東武志山根遺跡	39	照野分赤跡 I・Ⅲ・茎葉跡
10	愛宕山古墳	20	島山遺跡	30	東武志山根遺跡 I - Ⅲ	40	村東作跡
						31	人丸七地氷遺跡

番号	道跡名	番号	道跡名	番号	道跡名	番号	道跡名
56	松代平野南東端- 五郎峰	56	木村川- 花内山	56	松代平野南端- 人見山- 阿佐地	66	木村川- 花内山
57	相模川西岸	57	相模川中段- 人見山- 阿佐地	67	相模川- 人見山	67	久无站- 道迹
58	相模川中段- 人見山- 阿佐地	58	相模川- 人見山	68	相模川- 人見山- 道迹		
59	元町- 小见川	59	相模川- 人見山- 道跡	69	元町- 小见川- 道迹		
60	元町- 大境海岸 - 23- レンゲ	60	木村川- 小见川 - 道跡	70	元町- 大境海岸 - 23- 道跡		

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺跡・出土遺物
前川開拓地跡II・Ⅲ・Ⅳ		2002	桃文・古墳・平安・笠置神・△印痕
前川開拓地跡IV・Ⅴ		2002～2004	古墳・木柱跡・基盤
前川開拓地跡V・Ⅵ		2004	古墳・木柱跡・廻身・平安・印痕
前川開拓地跡		1993	古墳・瓦痕・廻身・平安・大溝
前川開拓地跡		1995	古墳・瓦痕・△印痕
元郷町北川遺跡		2002～2004	桃文・跡遺・古墳跡・桃文・△印痕
元郷町牛島川遺跡		2002～2004	古墳・木柱跡・上部破損遺跡・中輪・火葬跡
元郷町学校遺跡		2016	古墳・瓦痕・廻身・平安・瓦質・新立柱建物跡・△印痕・瓦質・廻身形土器・三足土器・電影人物品・「光」瓦片・瓦灰

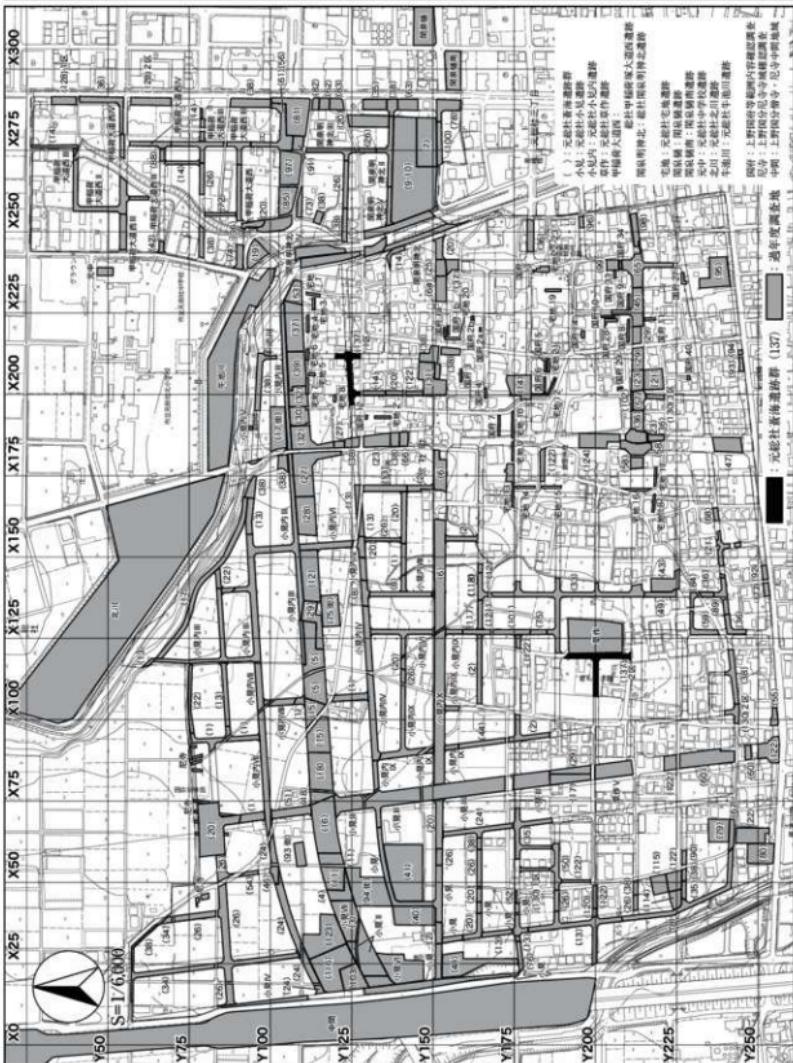


Fig. 4 周辺調査地点とグリッド設定図

III 調査の方針と経過

1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業における道路予定地であり、2工区に分かれている。1区 605 m²、2区 854 m²、総調査面積は 1,459 m²である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第IX系）X = 44000.000、Y = - 72200.000 を基点とする 4 m ピッチのものを使用し、経線を X、緯線を Y として北西隅を基点に番付して呼称とした。公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第IX系）	世界測地系（第IX系 測地成果 2011）
1区 X 198、Y 124	X = 43504.000 m、Y = - 71408.000 m	X = 43858.904 m、Y = - 71699.761 m
2区 X 108、Y 196	X = 43216.000 m、Y = - 71768.000 m	X = 43570.912 m、Y = - 72059.759 m

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.45 バックホー）にて表土掘削を行い、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精查、測量・写真撮影の手順で実施した。出土遺物に関しては、床面直上や遺構に伴うと判断したものはNa遺物とし、他の覆土中の破片等について一括遺物として取り上げた。

遺構の記録には、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集を行い、断面図については一部オルソーフォトに変換して編集を行った。記録写真は 35mm モノクロ・リバーサル、デジタルカメラの3種類を用いて撮影し、調査区の全景についてはドローンでの撮影を実施した。

整理作業での出土遺物の計測は、キーエンス社製 3Dスキャナー（VL-300）による機械計測を行った。出土した銅鏡等は、公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団でX線写真を撮影して頂いた。

2 調査経過

令和元年 12月 5日に調査区設定および器材準備、同日から重機による表土掘削を9日まで1区で実施した。10日から16日まで2区の表土掘削を行い、併行して遺構確認および遺構掘り下げを行った。令和2年1月16日に1区で、27日に2区でドローンによる全景撮影を実施し、前橋市教育委員会による検査を受けた。2月6日から13日まで埋め戻しを実施し、発掘調査を終了した。2月1日より整理作業および報告書作成を行った。

IV 基本層序

両調査区ともに、総社砂層（一部では総社砂層漸移層）を確認面として調査を実施した。2区では調査区東壁を中心部分的にではあるが「C 黒」層（2区IV層）が残存しており、総社砂層とともに確認面とした。

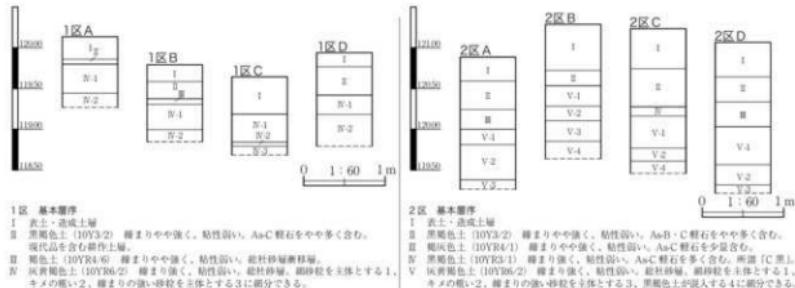


Fig. 5 基本層序

V 遺構と遺物

1 1区

(1) 壓穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig. 7・12、PL. 1・9)

位置 X212、Y126・127 主軸方向 N - 76° - E 規模 東西軸 (1.36) m、南北軸 (3.46) m、壁現高 0.24 m。住居北西隅の検出で、大半は調査区外となる。面積 (2.52) m² 床面 平坦であるが、住居隅のためか硬化は弱い。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 P 1・2 の 2 基が検出された。掘り方 総社砂層を掘り込みむ、地山硬化床。部分的に暗褐色土により構築されている。重複 なし。出土遺物 須恵器瓶類、土師器壺、甕等が出土しており、覆土から出土した土師器壺 (1・2) を図示。時期 出土遺物から 6 世紀後半から 7 世紀前半と考えられる。

H-2号住居跡 (Fig. 7・12・13、PL. 1・9・10)

位置 X211～213、Y124～126 主軸方向 N - 60° - E 規模 東西軸 5.67 m、南北軸 5.73 m、壁現高 0.37 m。住居南東隅は調査区外となる。面積 (26.70) m² 床面 全面的に硬化しており、南東から中央にかけて特に顕著である。カマド 検出されず。硬化面および焼土・灰の散布状況から、住居南東にあるものと考えられる。貯蔵穴 検出されず。柱穴 P 1～3 の 3 基が検出された。掘り方 総社砂層を掘り込み床面とする、地山硬化床。重複 D-3 と重複し、新旧関係は本遺構→D-3 である。出土遺物 須恵器壺 (1)、頭部に波状文を巡らせる須恵器甕 (2)、土師器壺 (3～6)、土師器鉢 (7)、土師器甕 (8～11)、土師器壺 (12・13)、石製紡錘車 (14) が出土している。(10)・(11) の長胴甕は P 1 上面に並べられた状態で出土した。(12) は大型品で須恵器と見紛うが、調整や焼成から土師器と判断した。時期 出土遺物から 6 世紀後半から 7 世紀初頭と考えられる。

H-3号住居跡 (Fig. 8・13、PL. 1・10)

位置 X209・210、Y123・124 主軸方向 N - 68° - E 規模 東西軸 4.57 m、南北軸 (1.76) m、壁現高 0.39 m。住居南半の検出である。面積 7.22 m² 床面 全面的に硬化しており、調査区際が最も硬化が強くなっている。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 P 1～4 の 4 基が検出された。掘り方 総社砂層を掘り込み床面とする、地山硬化床。重複 D-4 と重複し、新旧関係は本遺構→D-4 である。出土遺物 須恵器甕、土師器壺、甕等が出土しており、P 1 覆土から出土した土師器壺 (1) を図示。時期 出土遺物から 6 世紀後半から 7 世紀初頭と考えられる。

H-4号住居跡 (Fig. 8・9・13、PL. 1・10)

位置 X211・212、Y122・123 主軸方向 N - 117° - E 規模 東西軸 3.69 m、南北軸 3.42 m、壁現高 0.13 m。調査区北東で検出。住居北東隅はカクランにより削平される。面積 (9.52) m² 床面 カマド前から住居中央にかけて硬化する。カマド 東壁南寄りに 1 基検出した。確認長 0.83 m、燃焼部幅 0.28 m、袖の残存長は左(北)が 0.40 m、右(南)が 0.41 m を測る。煙道は壁外に 0.39 m 突出している。貯蔵穴 長軸 0.67 m、短軸 0.59 m、深さ 0.45 m を測る、楕円形の貯蔵穴が住居南東隅で検出された。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H-5・6 と重複し、新旧関係は H-6 → 本遺構 → H-5 である。出土遺物 須恵器高台付塊、灰釉陶器碗、羽釜等が出土しており、床面直上から出土した酸化焰焼成で底部回転糸切りによる須恵器塊 (1)・高台付皿 (2) を図示。時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀前半と考えられる。

H-5号住居跡 (Fig. 8・9、PL. 1・2・10)

位置 X212、Y122 主軸方向 N - 75° - W 規模 東西軸 (1.82) m、南北軸 3.37 m、壁現高 0.29 m。調査

区北東で検出、住居東半は調査区外となる。 面積 (8.01) m² 床面 カマド前を中心に全体的に硬化する。 カマド 東壁中央に1基検出。確認長1.14m、燃焼部幅0.57m、袖の残存長は左(南)が0.34m、右(北)が0.34m、煙道は壁外に0.51m突出している。構築材として左袖に安山岩が据えられている。 柱穴 検出されず。 挖り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-4・6と重複し、新旧関係はH-6→H-4→本遺構である。 出土遺物 床面直上から出土した酸化焰焼成で底部回転糸切りによる須恵器塊(1~4)、覆土から出土した墨書のある須恵器塊(5)、羽釜(6)を図示。(5)は酸化焰の須恵器で、墨書については判読不能である。 時期 重複関係や出土遺物から10世紀前半から中頃と考えられる。

H-6号住居跡 (Fig. 8・13, PL. I・10)

位置 X211・212, Y122・123 主軸方向 N - 127° - E 規模 東西軸(1.01)m、南北軸3.16m、壁現高0.10m。調査区東側で検出、他遺構との重複により部分的な検出に留まっている。 面積 (3.90) m² 床面 平坦な床面で、住居隅の検出のためか部分的に硬化が見られるのみである。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 挖り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-4・5と重複し、新旧関係は本遺構→H-4→H-5である。 出土遺物 酸化焰焼成の須恵器高台付塊(1)が床面直上から出土している。 時期 重複関係や出土遺物から10世紀前半と考えられる。

H-7号住居跡 (Fig. 9・13, PL. 2・10)

位置 X208, Y123・124 主軸方向 N - 90° - E 規模 東西軸(3.80)m、南北軸(1.86)m、壁現高0.33m。調査区中央で検出、部分的な検出に留まっている。 面積 (12.27) m² 床面 平坦な床面で、検出範囲の全面に硬化が見られる。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 挖り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 D-10・11, P-2と重複し、新旧関係は本遺構→D-10・11, P-2である。 出土遺物 土師器高坏(1)・短頭壺(2)が覆土中から出土している。 時期 出土遺物から6世紀後半と考えられる。

H-8号住居跡 (Fig. 9, PL. 2)

位置 X197・198, Y124・125 主軸方向 N - 81° - E 規模 東西軸(2.57)m、南北軸(3.46)m、壁現高0.23m。調査区西端で検出した。住居隅の検出および重複等で全容は把握できず。 面積 (2.00) m² 床面 平坦な床面で、検出範囲の全面に硬化が見られる。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 1基検出された。 挖り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 W-1と重複し、新旧関係は本遺構→W-1である。 出土遺物 覆土から陶磁器片等が出土しているが、直接の時期を示すものではない。

時期 重複関係および他遺構との関連から10世紀代と考えられる。

(2) 溝跡

W-1号溝跡 (Fig.10, PL. 2)

位置 X198, Y124・125 主軸方向 N - 2° - W 規模 長さ(3.82)m、上幅(0.99)m、下幅0.53m、深さ0.43m。 形状等 南北方向に走行し、断面形状は箱形・台形状を呈する。 重複 H-8, D-14と重複し、新旧関係はH-8, D-14→本遺構である。 出土遺物 焙烙等の小破片が出土している。 時期 重複関係から中世以降の開削と考えられる。

(3) 井戸跡・土坑・ピット (Fig. 8~11・13, PL. 2・10)

本調査区では井戸跡2基、土坑19基、ピット27基を確認している。重複関係や出土遺物等から、いずれも中世以後の遺構になるものと考えられる。

各計測値については「Tab. 2 1区井戸跡・土坑・ピット計測表」を参照のこと。

Tab. 2 1区井戸跡・土坑・ピット計測表

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形状	重複(古→新)	出土物	備考
I - 1	X 212, Y 120・121	0.87	0.78	(1.00)	円形		土12, 瓶4	
I - 2	X 205, Y 124	(1.07)	(0.34)	(0.68)	(方形)		瓶1	
D - 1	X 212, Y 127・128	1.40	1.24	0.34	円形	D - 2 → D - 1	土2, 瓶1	
D - 2	X 211, Y 127	0.86	(0.79)	0.32	(不整形)			
D - 3	X 211・212, Y 125	1.44	1.30	0.40	円形		土2, 瓶2, 瓶1	
D - 4	X 209・210, Y 124・125	1.31	(1.08)	0.53	(方形)		瓶3, 土2	
D - 5	X 209, Y 123・124	2.04	1.25	0.43	長方形	D - 6 → D - 5	土2, 瓶1, 瓶1	
D - 6	X 209, Y 124	0.71	0.70	0.35	円形	D - 6 → D - 5		
D - 7	X 198, Y 124・125	(1.69)	1.06	0.38	長方形	D - 8 → D - 7 → D - 12		
D - 8	X 198・199, Y 125	2.11	0.88	0.50	長方形	D - 8 → D - 7 → D - 12	土2	
D - 9	X 198・199, Y 125	1.20	0.87	0.36	長方形		土2, 陶磁1	
D - 10	X 208, Y 123・124	1.24	0.79	0.26	長方形	H - 7 → D - 10		
D - 11	X 208, Y 124	1.23	(0.96)	0.71	(長方形)	H - 7 → D - 11		
D - 12	X 198, Y 124・125	0.70	(0.38)	0.24	(長方形)	D - 8 → D - 7 → D - 12		
D - 13	X 197, Y 125	0.57	0.46	0.17	椭円形	D - 14 → D - 13		
D - 14	X 197・198, Y 125	0.80	(0.65)	0.21	(長方形)	D - 14 → W - 1		
D - 15	X 206, Y 124	(0.48)	(0.24)	0.40	(長方形)			
D - 16	X 205・206, Y 124	1.53	(1.03)	0.23	(長方形)			
D - 17	X 206, Y 124	(1.04)	(0.29)	0.28	(長方形)			
D - 18	X 204, Y 124	1.24	0.84	0.29	不整規円形	P - 20 → D - 18	土1	
D - 19	X 204・205, Y 124	1.03	0.80	0.34	長方形			
P - 1	X 212, Y 126	0.29	0.35	0.10	椭円形			
P - 2	X 208, Y 124	0.59	0.58	0.57	方形	H - 7 → P - 2		
P - 3	X 198, Y 125	0.51	0.40	0.50	椭円形			
P - 4	X 198, Y 125	0.22	0.21	0.13	方形			
P - 5	X 198, Y 125	0.29	0.27	0.30	方形	P - 6 → P - 5		
P - 6	X 198, Y 125	0.30	0.29	0.22	方形	P - 6 → P - 5		
P - 7	X 199, Y 125	0.31	0.27	0.46	方形			
P - 8	X 200, Y 125	0.29	0.26	0.73	方形			
P - 9	X 204, Y 124	0.34	0.31	0.34	方形			
P - 10	X 204, Y 124・125	0.41	(0.37)	0.57	方形	P - 18 → P - 10		
P - 11	X 204, Y 125	0.39	(0.34)	0.45	方形			
P - 12	X 203, Y 125	0.40	(0.29)	0.73	方形	P - 12 → P - 25		
P - 13	X 203・204, Y 124	0.42	0.41	0.46	方形	P - 24 → P - 13		
P - 14	X 203, Y 124	0.51	0.49	0.42	方形		培塿1	
P - 15	X 203, Y 124	0.47	0.40	0.54	方形			
P - 16	X 203, Y 124	0.44	(0.21)	0.25	方形			
P - 17	X 204, Y 124	0.27	0.22	0.34	方形			
P - 18	X 204, Y 124・125	0.26	(0.20)	0.29	方形	P - 18 → P - 10		
P - 19	X 204, Y 124・125	0.18	0.14	0.31	方形			
P - 20	X 204, Y 124	0.31	0.31	0.50	方形	P - 20 → D - 18		
P - 21	X 204, Y 124	0.23	0.22	0.24	方形			
P - 22	X 203, Y 124・125	0.27	0.23	0.29	方形			
P - 23	X 203, Y 124	0.36	0.14	0.22	方形			
P - 24	X 203, Y 124	0.37	0.36	0.39	方形	P - 24 → P - 13		
P - 25	X 203, Y 124・125	0.37	0.31	0.34	方形	P - 12 → P - 25		
P - 26	X 203, Y 124	0.45	0.40	0.58	方形	P - 26 → P - 27		
P - 27	X 203, Y 124	0.29	0.25	0.49	方形	P - 26 → P - 27		

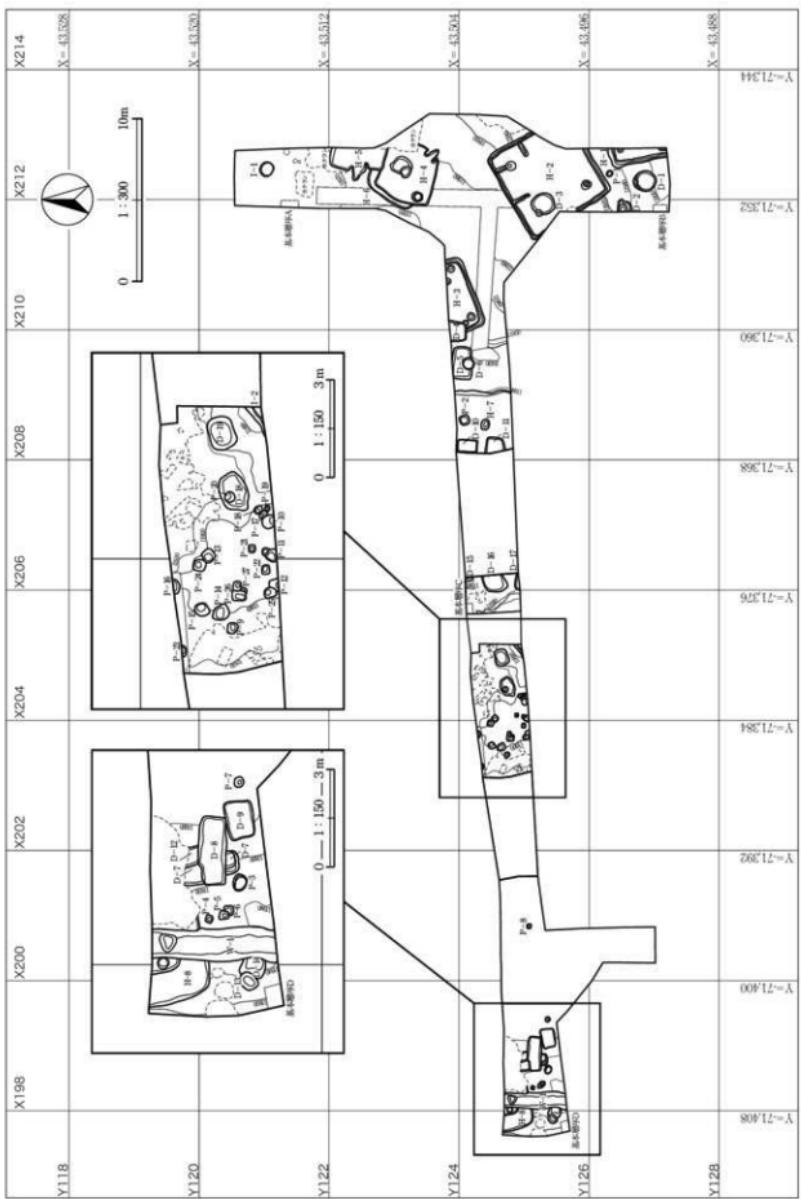
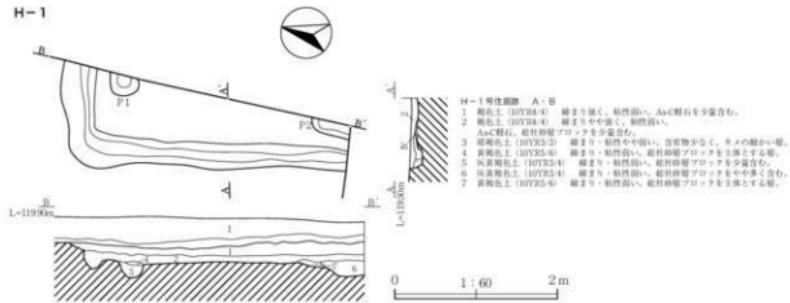


Fig.6 1区 全体図

H-1



H-2

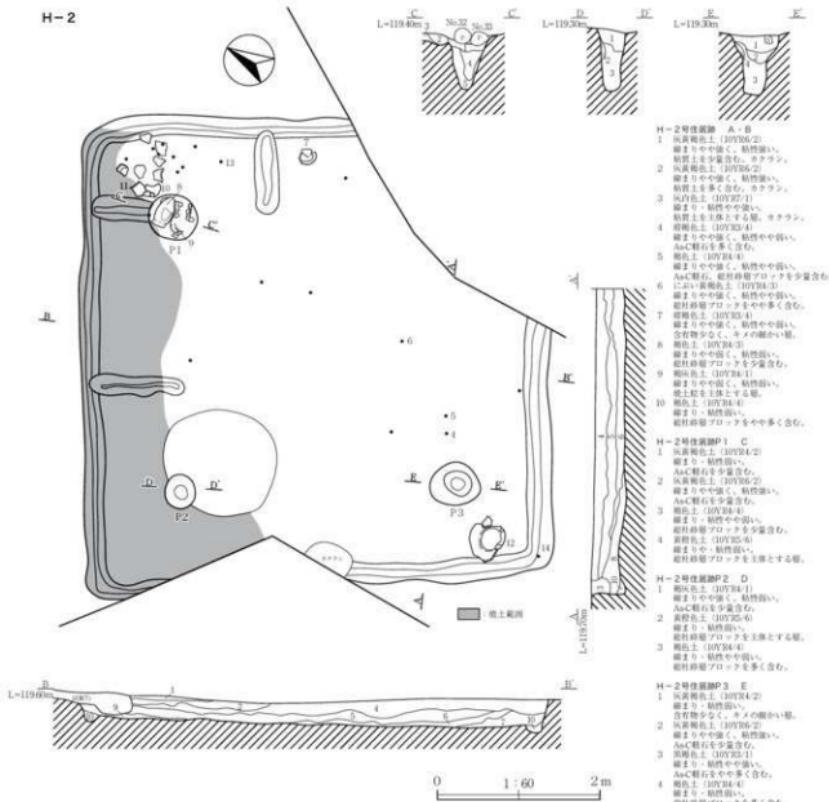
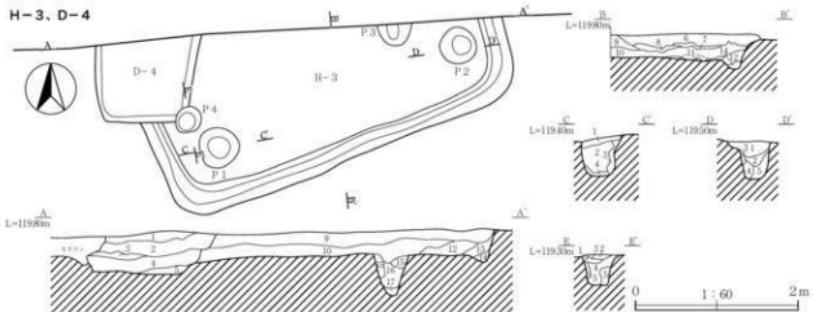


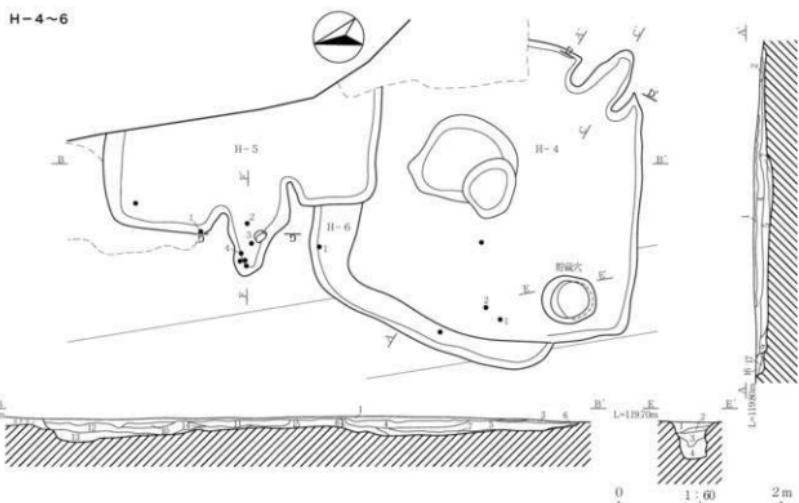
Fig. 7 1区 H-1・2号住居跡



- H-3号断面 D-4号土壌 A-B
1 黑褐色土 (10732-1) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。D-4層土。
2 黑褐色土 (10732-2) 繁り・粘性弱い、AaC軽石を少含む。D-4層土。
3 黑褐色土 (10732-3) 繁り・粘性弱い、AaC軽石を多く含む。D-4層土。
4 黑褐色土 (10732-4) 繁り・粘性弱い、AaC軽石を多く含む。D-4層土。
5 黑褐色土 (10732-5) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。D-4層土。
6 黑褐色土 (10732-6) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックをやや多く含む。
7 黑褐色土 (10732-7) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
8 黑褐色土 (10732-8) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
9 黑褐色土 (10732-9) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
10 黑褐色土 (10732-10) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
11 黑褐色土 (10732-11) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
12 黒褐色土 (10732-12) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
13 黑褐色土 (10732-13) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。D-3層土。
14 黑褐色土 (10732-14) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。D-3層土。
15 黑褐色土 (10732-15) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。D-3層土。

- H-3号断面 P2・D
1 黑褐色土 (10732-1) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
2 黑褐色土 (10732-2) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
3 黑褐色土 (10732-3) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
4 黑褐色土 (10732-4) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
5 黑褐色土 (10732-5) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
H-4号断面
1 黑褐色土 (10734-1) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質・塊状砂質ブロックを少含む。
2 黑褐色土 (10734-2) 繁り・粘性弱い、AaC軽石を少含む。
3 黑褐色土 (10734-3) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。
4 黑褐色土 (10734-4) 繁り・粘性弱い、AaC軽石を少含む。
5 黑褐色土 (10734-5) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。

H-3号断面 P2・D
1 黑褐色土 (10732-1) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質・塊状砂質ブロックを少含む。



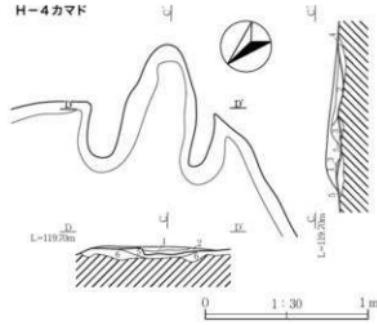
- H-4-6 号断面 A-B
1 黑褐色土 (10734-1) 繁り・粘性弱い、AaC軽石を少含む。
2 黑褐色土 (10734-2) 繁り・粘性弱い、AaC軽石を多含む。H-1層土。
3 黑褐色土 (10734-3) 繁り・粘性弱い、含物物少々、キメの細かい砂。H-1層土。
4 黑褐色土 (10734-4) 繁り・粘性弱い、AaC軽石を少含む。H-4層土。
5 黑褐色土 (10734-5) 繁り・粘性弱い、AaC軽石を少含む。H-4層土。
6 黑褐色土 (10734-6) 繁り・粘性弱い、AaC軽石を少含む。H-4層土。
7 に伏し黄褐色土 (10734-7) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを多く含む。H-4層土。
8 黄褐色土 (10734-8) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを多く含む。H-4層土。
9 黄褐色土 (10734-9) 繁り・粘性弱い、含物物少々、キメの細かい砂。H-3層土。
10 黄褐色土 (10734-10) 繁り・粘性弱い、含物物少々、キメの細かい砂。H-3層土。
11 黄褐色土 (10734-11) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。H-3層土。
12 黄褐色土 (10734-12) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックをやや多く含む。H-3層土。
13 黄褐色土 (10734-13) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックをやや多く含む。H-3層土。

- H-4-6 号断面 P2・D
1 黑褐色土 (10732-2) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックをやや多く含む。H-5層土。
2 黑褐色土 (10732-3) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。H-5層土。
3 黑褐色土 (10732-4) 繁り・粘性弱い、AaC軽石を多含む。H-6層土。
4 黑褐色土 (10732-5) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。H-6層土。

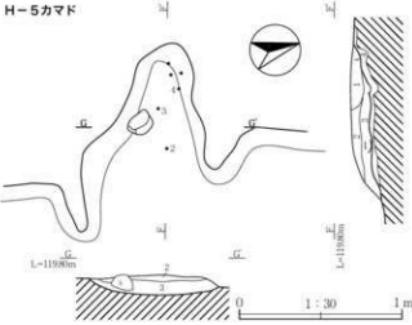
H-4-6 号断面 P2・D
1 黑褐色土 (10732-2) 繁り・粘性弱い、粗粒砂質ブロックを少含む。

Fig. 8 1区 H-3～6号断面、D-4号土壌

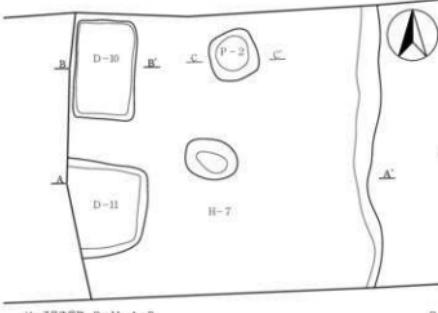
H-4カマド



H-5カマド



H-7、D-10・11、P-2



H-8号住居跡

H-8

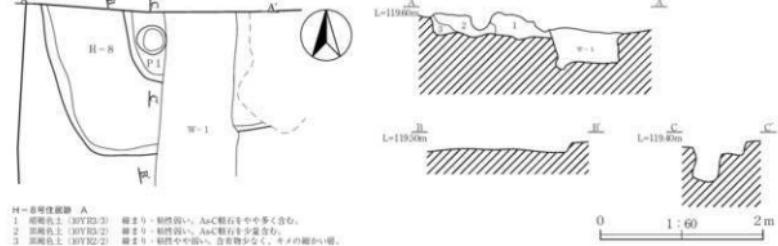
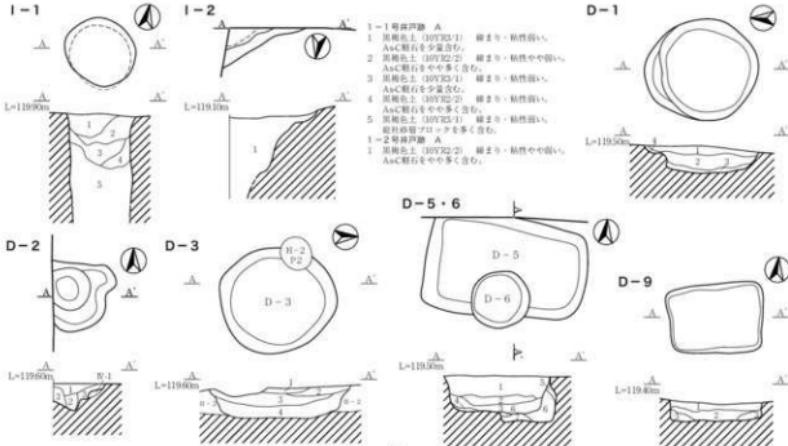
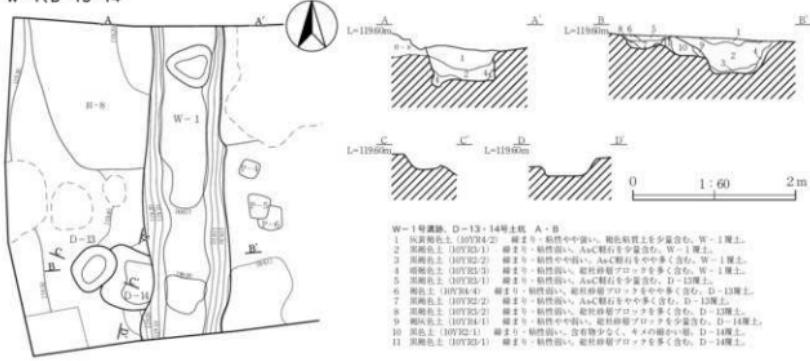


Fig. 9 1区 H-4・5号住居跡カマド、H-7・8号住居跡、D-10・11号土坑、P-2号ビット

W-1・D-13・14



D-7・8・12

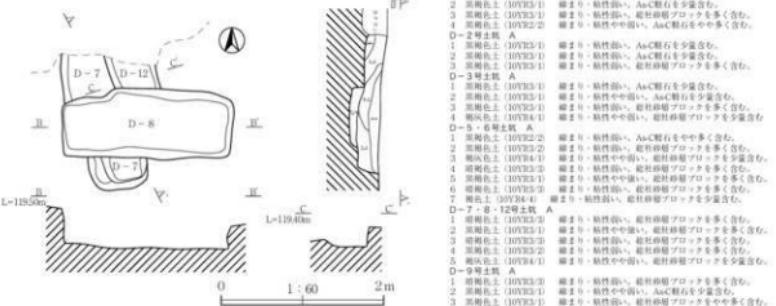


Fig.10 1区 W-1号溝跡、井戸跡、土坑(1)

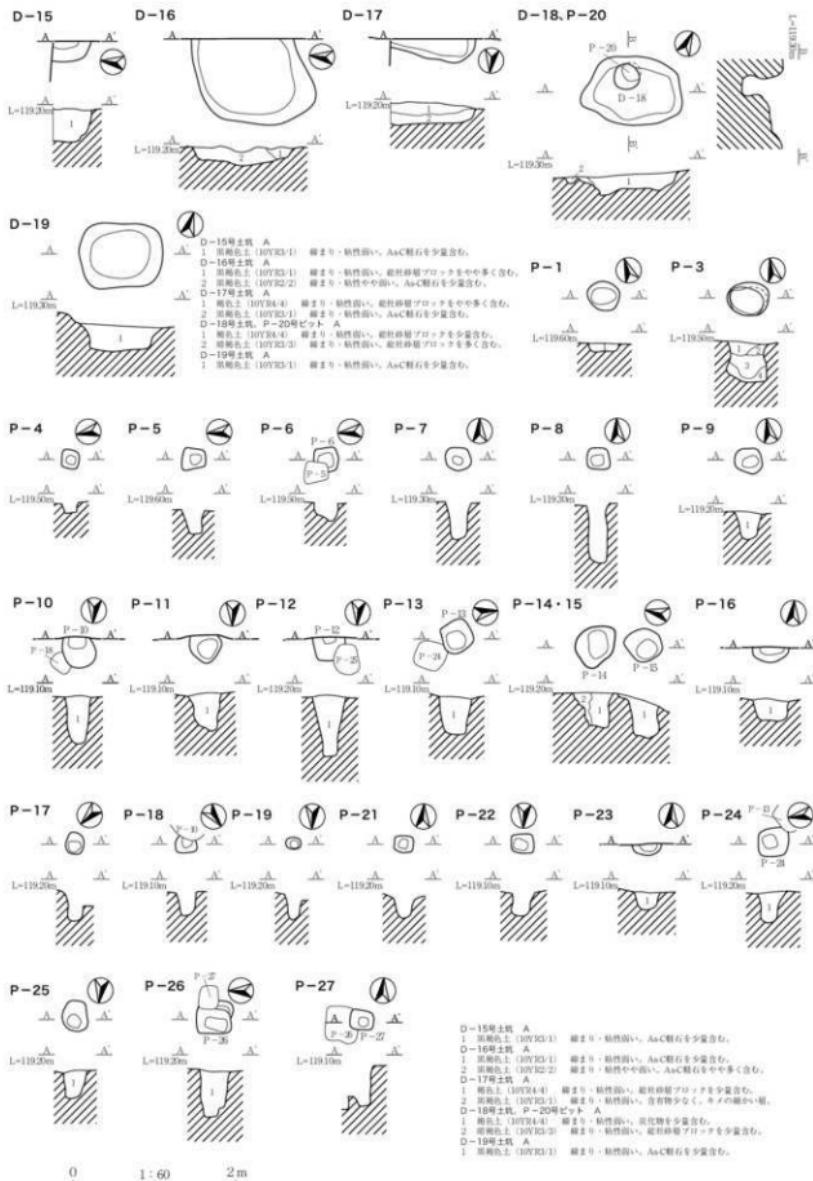


Fig.11 1区 土坑 (2)、ピット

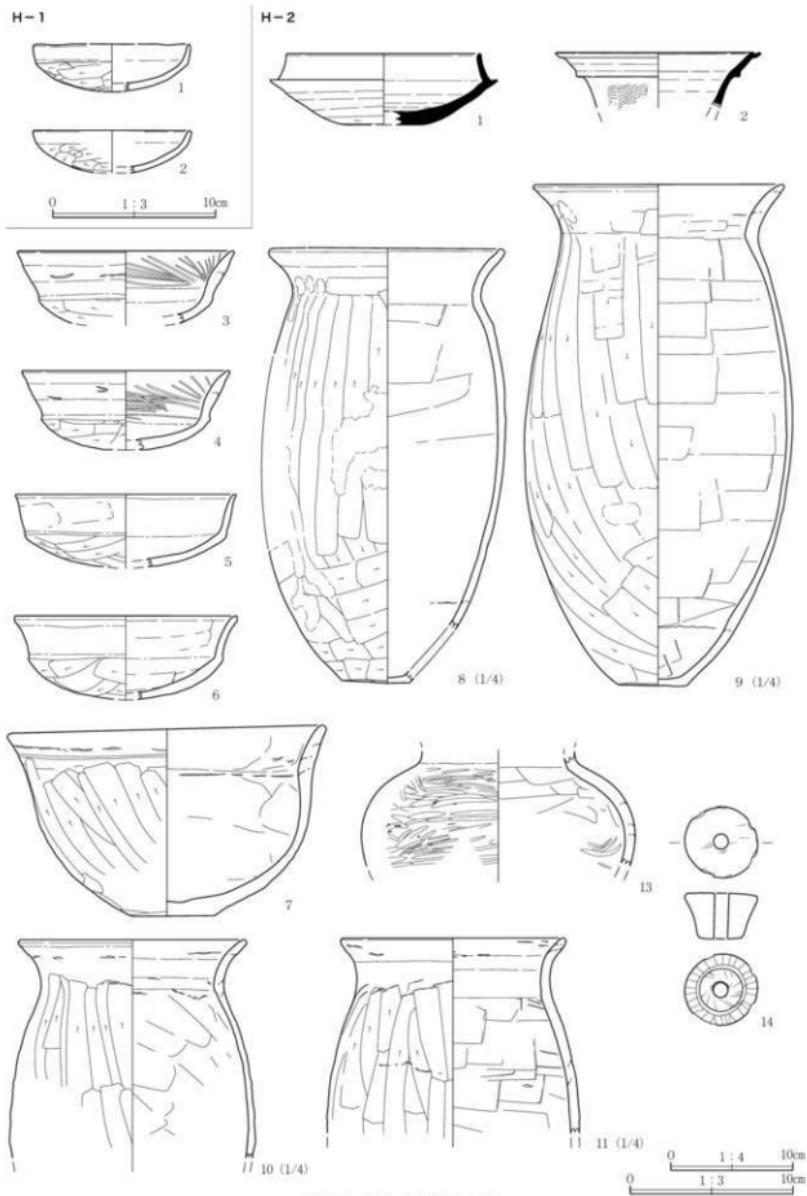
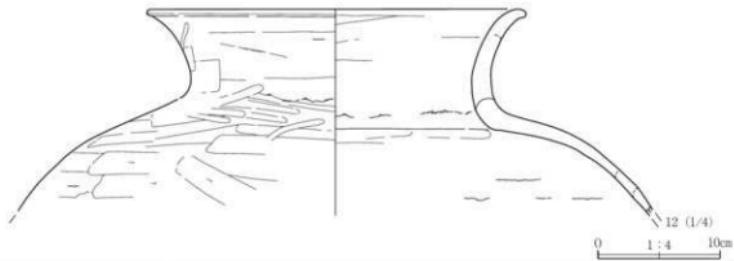
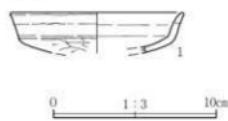


Fig.12 1区 出土遺物 (1)

H-2



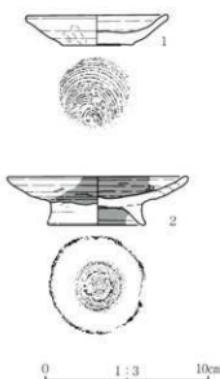
H-3



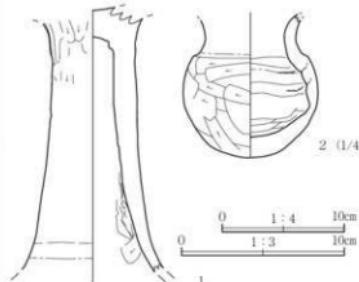
H-5



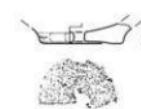
H-4



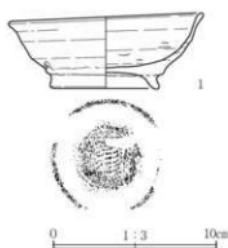
H-7



D-18



H-6



I-2



造機外



Fig.13 1区 出土遺物 (2)

Tab. 3 1区出土遺物観察表

H-1

No	出土位置	種別	基準	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・形態、文様等の特徴	残存状況・備考
1	魔人	土器部	年	(36)	—	(28)	素地灰、素身	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。	口部剥げ。
2	魔人	土器部	年	(36)	—	(26)	素地灰、素身	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。	口部剥げ。

H-2

No	出土位置	種別	基準	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・形態、文様等の特徴	残存状況・備考
1	魔人	土器部	年	(31)	(13)	4.4	石系、瓦石	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。	1/2残存。
2	魔人	土器部	年	(32)	—	(3)	白系	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。	口部剥げ。
3	N-27	土器部	年	(33)	—	(46)	白色系	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、ヘタリ有り、表面ナマ。	口部剥げ。
4	N-28	土器部	年	(32)	—	(48)	白色系	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、ヘタリ有り、表面ナマ。	口部剥げ。
5	魔人	土器部	年	(33)	—	(45)	石系	直好	灰	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面ナマ。	1/2残存。
6	N-29	土器部	年	(33)	—	(52)	白色系	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面ナマ。	1/2残存。
7	N-32	土器部	年	(34)	5.6	11.1	石系、瓦石	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面ナマ。	2/3残存。
8	N-32	土器部	年	39.4	5.5	35.8	白色系	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面ナマ。	1/2残存。
9	N-32	土器部	年	22.0	5.7	43.2	白色系	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面ナマ。	1/2残存。
10	N-13	土器部	年	(38)	—	(27)	石系、素身	直好	灰	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面ナマ。	1/2残存、底部P半欠損。
11	N-14	土器部	年	(38)	—	(36)	石系、素身	直好	灰	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面ナマ。	1/2残存、底部P半欠損。
12	N-30	土器部	年	(31)	—	(36)	石系、素身	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面ナマ。	1/2残存，底部P半欠損。
13	N-3	土器部	年	—	—	(87)	素身	直好	灰	内側に焼成ヘタリ有り、底にカス有り。 内側に焼成ヘタリ有り、底にカス有り。	倒伏。
No	出土位置	種別	基準	口径	底径	高さ	石材	焼成	色調	器形、成・形態、文様等の特徴	残存状況・備考
14	魔人	石器部	年	16	24	49	石系	直好	褐	小口に丁寧な彫刻有り。表面には擦からむれ状の軽擦により、表面を有する部は削除された。	1/2残存。

H-3

No	出土位置	種別	基準	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・形態、文様等の特徴	残存状況・備考
1	F-1魔人	土器部	年	(30)	—	(24)	素身	直好	褐	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ、表面ナマ。	口部剥げ。

H-4

No	出土位置	種別	基準	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・形態、文様等の特徴	残存状況・備考
1	N-1	土器部	年	6.8	4.3	1.8	白色系	直好	褐	内側に焼成コロナリ、25ドクナマナ感有り。外側は細かく削除有り。	難定年、1/2残存。
2	N-2	土器部	年	(31)	5.8	3.9	白色系	直好	褐	内側に焼成コロナリ、25ドクナマナ感有り。外側は細かく削除有り。	難定年、2/3残存。

H-5

No	出土位置	種別	基準	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・形態、文様等の特徴	残存状況・備考
1	N-1	土器部	年	(36)	5.4	2.8	白色系	直好	浅黄	内側に焼成コロナリ、24ドクナマナ感有り。外側は細かく削除有り。	難定年、1/2残存。
2	N-3	土器部	年	9.6	5.4	2.9	白色系	直好	浅黄	内側に焼成コロナリ、24ドクナマナ感有り。外側は細かく削除有り。	難定年、2/3残存。
3	N-4	土器部	年	10.4	5.2	3.2	赤・白色系	直好	浅黄	内側に焼成コロナリ、24ドクナマナ感有り。外側は細かく削除有り。	難定年、完存。
4	N-5	土器部	年	9.6	4.2	3.0	素地灰	直好	褐	内側に焼成コロナリ、24ドクナマナ感有り。外側は細かく削除有り。	難定年、1/2残存。
5	魔人	土器部	年	—	—	3.8	白色系	直好	灰	内側に焼成コロナリ、24ドクナマナ感有り。整齊有り。	難定年、1/2残存。
6	魔人	質部	年	(22)	—	(7.4)	白色系	直好	灰	内側に焼成コロナリ、22ドクナマナ感有り。 内側に焼成コロナリ、22ドクナマナ感有り。	1/2残存、1/2残存。

H-6

No	出土位置	種別	基準	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・形態、文様等の特徴	残存状況・備考
1	N-1	石器部	高台付属	32	5.8	4.3	白色系	直好	黄白	内側に焼成コロナリ、24ドクナマナ感有り。外側は細かく削除有り。	難定年、2/3残存。

H-7

No	出土位置	種別	基準	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・形態、文様等の特徴	残存状況・備考
1	魔人	土器部	年	—	—	(10)	石系、素身	直好	灰	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ。	難定年。
2	魔人	土器部	年	—	—	(11)	石系、素身	直好	灰	内側に焼成コロナリ、表面にヘタリ有り。 内側に焼成コロナリ。	1/2残存、口縁剥離。

I-2

No	出土位置	種類名	国名	初跡年代	材質	直径	穿径	厚さ	重量	器形、成・形態、文様等の特徴	残存状況・備考
1	魔人	实心丸錠	日本	先E-13 (340-年)	銅	238.0mm	6.0mm	1.0mm	23 g	丸錠。	完存。

D-18

No	出土位置	種別	基準	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・形態、文様等の特徴	残存状況・備考
D-18	魔人	实心丸錠	年	—	1.2	1.2	素地灰	直好	褐	内側に焼成有り。 内側に24ドクナマナ感有り。	難定年、初期転用品。

道模外

No	出土位置	種類名	国名	初跡年代	材質	直径	穿径	厚さ	重量	器形、成・形態、文様等の特徴	残存状況・備考
1	I-2 土器	实心丸錠	日本	先E-13 (340-年)	銅	231.0mm	5.7mm	1.0mm	23 g	丸錠。	完存。

2 2区

(1) 壁穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig.15・25、PL. 3・10)

位置 X110・111、Y199・200 主軸方向 N - 105° - E 規模 東西軸4.13 m、南北軸(2.96) m、壁現高0.34 m。住居北半は調査区外となる。最終段階で As-B 軽石により埋没しているが床面直上に暗褐色土が堆積していることから As-B 軽石段階には住居は廃絶していたと考えられる。面積 (10.20) m² 床面 平坦で、全面的に硬化する。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 先行する遺構を掘り込んで床面とする。重複 H - 28・29・30・31・36、W - 4、P - 2と重複し、本遺構が後出する。出土遺物 覆土から出土した須恵器塊(1)、羽釜(2)、軒平瓦(3)を図示。時期 出土遺物および覆土から11世紀後半と考えられる。

H-2号住居跡 (Fig.15、PL. 3)

位置 X107、Y200 主軸方向 N - 89° - E 規模 東西軸(0.83) m、南北軸(3.50) m、壁現高0.28 m。調査区東端での検出で、大半は調査区外となる。面積 (1.60) m² 床面 検出したのは住居隅であり、床面の硬化は認められず。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H - 4・24と重複し、新旧関係はH - 24 → H - 4 → 本遺構である。出土遺物 なし。時期 重複関係から10世紀代と考えられる。

H-3号住居跡 (Fig.15、PL. 3)

位置 X113、Y200・201 主軸方向 N - 89° - E 規模 東西軸2.82 m、南北軸(2.83) m、壁現高0.56 m。住居北半の検出である。面積 (6.70) m² 床面 全面的に硬化している。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H - 5・6・22・26と重複し、新旧関係はH - 6 → 本遺構 → H - 5・26 → H - 22である。出土遺物 酸化焰の須恵器塊、土師器壺・甕、羽釜、平瓦等が出土しているが、いずれも小破片のため図示に至らず。時期 重複関係や出土遺物から10世紀後半から11世紀初頭と考えられる。

H-4号住居跡 (Fig.15・25、PL. 4・10)

位置 X107・108、Y200・201 主軸方向 N - 89° - E 規模 東西軸(3.07) m、南北軸(3.86) m、壁現高0.56 m。住居北東隅に0.73 mの張り出し部を持ち、住居内ととに周溝が巡る。面積 (11.16) m² 床面 カマド前から住居中央にかけて硬化する。カマド 東壁に1基検出したが、南半は調査区外となる。確認長0.88 m、燃焼部幅(0.18) m、袖の残存長は左(北)が0.31 mを測る。煙道は壁外に0.30 m突出している。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H - 2・24・25、W - 3と重複し、新旧関係はH - 24 → 本遺構 → H - 2・25、W - 3である。出土遺物 須恵器壺・甕、土師器壺・甕が出土しており、床面直上から出土した土師器壺(1)を図示。時期 重複関係や出土遺物から8世紀中頃と考えられる。

H-5号住居跡 (Fig.16、PL. 4)

位置 X112・113、Y199・200 主軸方向 N - 84° - E 規模 東西2.78 m、南北軸(1.73) m、壁現高0.32 m。住居北東隅は調査区外となる。面積 (4.13) m² 床面 平坦であるが、全面的に硬化は弱い。カマド 東壁南寄りに1基検出した。確認長0.56 m、燃焼部幅0.39 m、袖の残存長は左(北)が0.22 m、右(南)が0.17 mを測る。煙道は壁外に0.25 m突出している。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込みむ、地山硬化床。部分的に暗褐色土により構築されている。重複 H - 3・6と重複し、新旧関係はH - 6 → H - 3 → 本遺構である。出土遺物 覆土およびカマドから須恵器甕、平瓦等が出土している

が、いずれも小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-6号住居跡 (Fig.16・25, PL. 4・10)

位置 X112・113, Y199～201 主軸方向 N - 90° - E 規模 東西軸 (3.63) m、南北軸 (4.21) m、壁現高 0.28 m。住居西半の検出である。 面積 (10.37) m² 床面 全面的に硬化している。 カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 挖り方 総社砂層を掘り込んで床面とする地山硬化床で、部分的に暗褐色土により構築されている。掘り方と考えられる凹凸が確認された。 重複 H-3・5と重複し、新旧関係は本造構→H-3→H-5である。 出土遺物 覆土中から灰釉陶器碗 (1) が出土している。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀前半から中頃と考えられる。

H-7号住居跡 (Fig.16・26, PL. 4・10)

位置 X115～117, Y199・200 主軸方向 N - 120° - E 規模 東西軸 3.50 m、南北軸 (3.85) m、壁現高 0.26 m。住居北半は調査区外となる。 面積 (7.18) m² 床面 平坦な床面で、カマド前を中心として全面的に硬化する。 カマド 東壁南寄りに 1 基検出した。確認長 0.60 m、燃焼部幅 0.16 m、袖の残存長は左(北)が 0.30 m を測り、右袖は残存せず。煙道は壁外に 0.27 m 突出している。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 挖り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-12 と重複し、新旧関係は H-12 → 本造構である。 出土遺物 床面直上から酸化焰の須恵器塊 (1・2)・高台付塊 (3・4)、カマド覆土から軒平瓦 (5) が出土している。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀中頃と考えられる。

H-8号住居跡 (Fig.17, PL. 4)

位置 X119・120, Y196・197 主軸方向 N - 82° - E 規模 東西軸 (2.08) m、南北軸 2.80 m、壁現高 0.10 m。調査区北側で検出し、住居東半は調査区外となる。上部の削平が強く、非常に浅い住居となっている。 面積 (4.87) m² 床面 全体的に平坦で、住居中央に硬化面が認められる。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 挖り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 P-1 と重複し、新旧関係は本造構→P-1 である。 出土遺物 覆土中より酸化焰の須恵器塊等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 出土遺物から 10 世紀代と考えられる。

H-9号住居跡 (Fig.17・26, PL. 4・10)

位置 X119・120, Y197～199 主軸方向 N - 114° - E 規模 東西軸 (4.02) m、南北軸 3.79 m、壁現高 0.22 m。住居中央の検出である。 面積 (10.39) m² 床面 全体的に平坦で、部分的に硬化面が認められる。 カマド 検出されず。 住居東側に硬化が強く、カクラン部にカマドがあったものと考えられる。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 挖り方 総社砂層を掘り込みむ、地山硬化床。部分的に暗褐色土により構築されている。 重複 なし。 出土遺物 酸化焰の須恵器高台付塊、羽釜、土釜等が出土している。(1) は床面直上から出土した平瓦で凸面にヘラ記号「×」が見られ、(2) は覆土中から出土した丸瓦で凸面にヘラ文字が認められるが欠損により判読不能である。 時期 出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-10号住居跡 (Fig.17・26, PL. 4・11)

位置 X119, Y199・200 主軸方向 N - 115° - E 規模 東西軸 261 m、南北軸 285 m、壁現高 0.16 m。 面積 6.28 m² 床面 全面的に硬化しており、カマド前から中央にかけて特に顕著である。 カマド 東壁南寄りに 1 基検出した。確認長 0.57 m、燃焼部幅 0.47 m、袖の残存長は左(北)が 0.22 m を測り、右袖は残存せず。煙道は壁外に 0.36 m 突出している。中央に安山岩製の支脚が残存する。 貯蔵穴 長軸 0.49 m、短軸 0.41 m、深さ 0.17 m を測る平面楕円形の貯蔵穴が住居南西隅に 1 基検出された。 柱穴 検出されず。 挖り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 なし。 出土遺物 酸化焰の須恵器塊 (1～3)・高台付塊 (4・5)、羽釜 (6)、凸面にヘラ文字と押印「當」のある平瓦 (7) が出土している。 時期 出土遺物から 10 世紀中頃と考えられる。

H-11号住居跡 (Fig.18・26、PL. 5・11)

位置 X119、Y195・196 主軸方向 N - 72° - E 規模 東西軸 (1.91) m、南北軸 3.38 m、壁現高 0.57 m。住居東半の検出である。面積 (3.44) m² 床面 全面に硬化しており、カマド前が最も硬化が強くなっている。カマド 東壁南寄りに 1 基検出した。確認長 0.91 m、燃焼部幅 0.33 m、袖の残存長は右 (南) が 0.33 m、を測り、左袖は残存せず。煙道は壁外に 0.51 m 突出している。上部は後出する D-1 により削平される。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 D-1 と重複し、新旧関係は本遺構 → D-1 である。出土遺物 床面直上から出土した土師器壺 (1~3) を図示。時期 出土遺物から 7 世紀末から 8 世紀初頭と考えられる。

H-12号住居跡 (Fig.18・26・27、PL. 5・11)

位置 X117・118、Y199 ~ 201 主軸方向 N - 84° - E 規模 東西軸 3.94 m、南北軸 (5.17) m、壁現高 0.51 m。住居北隅は調査区外となる。面積 (17.42) m² 床面 カマド前を中心として、全面に硬化する。西・南壁には周溝が巡る。カマド 東壁南寄りに 1 基検出した。確認長 1.56 m、燃焼部幅 0.67 m、袖の残存長は左 (北) が 0.71 m、右 (南) が 0.63 m を測る。煙道は壁外に 0.63 m 突出している。残存状態は良好であり、両袖ともに凝灰岩質砂岩を構築材として使用、同質の支脚も残存する。焚口には袖に掛けていたと思われる凝灰岩質砂岩が崩落していた。貯蔵穴 長軸 0.70 m、短軸 0.62 m、深さ 0.25 m を測る、平面隅丸方形の貯蔵穴が住居南東隅で検出された。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H-7・23 と重複し、新旧関係は本遺構 → H-7・23 である。出土遺物 須恵器蓋 (1)・瓶類の底部 (2)、土師器壺 (3~7)・壺 (8~10)、石製品の紡錘車 (11) が出土している。時期 重複関係や出土遺物から 8 世紀前半と考えられる。

H-13号住居跡 (Fig.19・27、PL. 5・11)

位置 X117・118、Y201・202 主軸方向 N - 92° - E 規模 東西軸 3.96 m、南北軸 4.15 m、壁現高 0.28 m。住居南西隅は調査区外となる。面積 (9.57) m² 床面 カマド前を中心として、全面に硬化する。カマド 東壁南寄りに 1 基検出した。確認長 1.56 m、燃焼部幅 0.43 m、煙道は壁外に 1.44 m 突出している。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複なし。出土遺物 酸化焰焼成の須恵器小皿 (1・2)・壺 (3~5) が床面直上およびカマドから出土している。時期 出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-14号住居跡 (Fig.17、PL. 5)

位置 X120、Y201 主軸方向 N - 90° - E 規模 東西軸 (0.34) m、南北軸 (2.93) m、壁現高 0.28 m。住居西端の検出であり、大半は調査区外となる。面積 (5.44) m² 床面 住居隅のためか、硬化は認められず。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複なし。出土遺物 須恵器壺、壺等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。時期 出土遺物から 10 世紀代と考えられる。

H-15号住居跡 (Fig.19、PL. 5)

位置 X119・120、Y205・206 主軸方向 N - 127° - E 規模 東西軸 (3.21) m、南北軸 (3.17) m、壁現高 0.16 m。住居東半は調査区外となる。上部の削平が強く、浅い住居となっている。面積 (4.27) m² 床面 平坦な床面で、硬化は弱い。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複なし。出土遺物 覆土から土師器壺の小破片が 1 点出土しているのみである。時期 出土遺物が僅少で判然としないが、10 世紀代と考えられる。

H-16号住居跡 (Fig.19、PL. 5)

位置 X119、Y205・206 主軸方向 N - 120° - E 規模 東西軸 2.15 m、南北軸 (3.03) m、壁現高 0.11 m。

住居南東隅は調査区外となる。上部の削平が強く、浅い住居となっている。 面積 (4.27) m² 床面 平坦な床面で、硬化は弱い。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 なし。 出土遺物 覆土から須恵器壺、土師器壺の小破片が1点ずつ出土しているのみである。 時期 出土遺物が僅少で判然としないが、10世紀代と考えられる。

H-17号住居跡 (Fig.19, PL. 5)

位置 X119、Y207・208 主軸方向 N - 134° - E 規模 東西軸 (3.10) m、南北軸 (4.96) m、壁現高 0.37 m。調査区南側での検出である。 面積 (10.15) m² 床面 全体的に平坦であり、住居中央を中心に硬化する。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込みむ、地山硬化床。部分的に暗褐色土により構築されている。 重複 W-1と重複し、新旧関係は本遺構→W-1である。 出土遺物 須恵器壺、平瓦・丸瓦が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 出土遺物が僅少で判然としないが、10世紀代と考えられる。

H-18号住居跡 (Fig.20, PL. 6)

位置 X119・120、Y202・203 主軸方向 N - 92° - E 規模 東西軸 (1.41) m、南北軸 (1.93) m、壁現高 0.27 m。住居北東隅の検出である。 面積 (2.01) m² 床面 全面的に硬化している。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-19と重複し、新旧関係は本遺構→H-19である。 出土遺物 須恵器壺・壺、土師器壺、平瓦等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係や出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

H-19号住居跡 (Fig.20・27, PL. 6・11)

位置 X119・120、Y203 主軸方向 N - 95° - E 規模 東西軸 (2.28) m、南北軸 (1.93) m、壁現高 0.21 m。住居北東隅の検出である。 面積 (2.01) m² 床面 全面的に硬化している。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-18・21、W-2と重複し、新旧関係は H-18→本遺構→H-21→W-2である。 出土遺物 酸化焰焼成で底部回転糸切りの須恵器壺（1）の他、灰釉陶器碗等が出土している。 時期 重複関係や出土遺物から10世紀後半と考えられる。

H-20号住居跡 (Fig.20, PL. 6)

位置 X119・120、Y204 主軸方向 N - 82° - E 規模 東西軸 (0.96) m、南北軸 (1.81) m、壁現高 0.23 m。住居南東隅の検出である。 面積 (1.32) m² 床面 全面的に硬化している。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-21、W-2と重複し、新旧関係は H-21→本遺構→W-2である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係から10世紀中頃と考えられる。

H-21号住居跡 (Fig.20, PL. 6)

位置 X119・120、Y203・204 主軸方向 N - 89° - E 規模 東西軸 (1.31) m、南北軸 3.49 m、壁現高 0.34 m。住居西半の検出である。 面積 (2.53) m² 床面 全面的に硬化している。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-19・20とW-2と重複し、新旧関係は H-19→本遺構→H-20→W-2である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係から10世紀後半と考えられる。

H-22号住居跡 (Fig.20・27・28, PL. 6・12)

位置 X113・114、Y200・201 主軸方向 N - 88° - E 規模 東西軸 4.39 m、南北軸 (3.41) m、壁現高 0.28 m。住居南半は調査区外となる。 面積 (11.52) m² 床面 全面的に硬化しており、南東から中央にかけて特に顕著である。 カマド 検出されず。 硬化面および焼土・灰の散布状況から、住居南東にありカクランにより

削平されていると考えられる。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 先行する遺構の覆土を掘り込み、床面としている。重複 H-3・26・27、T-1、D-3と重複し、新旧関係はH-3・27→H-26→D-3→本遺構→T-1である。出土遺物 灰釉陶器碗（1・2）、酸化焰焼成で内面に法輪状の暗文を施す須恵器高台付塊（3・4）が出土している。3・4ともに出土位置がカクラン部にあたり、下層のH-22に属する可能性もある。時期 重複関係や出土遺物から10世紀後半と考えられる。

H-23号住居跡 (Fig.21・27, PL. 6・12)

位置 X118・119、Y200・201 主軸方向 N-91°-E 規模 東西軸3.64m、南北軸(481)m、壁現高0.32m。住居南西隅は調査区外となる。面積 (1297) m² 床面 カマド前を中心として、全面的に硬化している。カマド 東壁中央に1基検出した。確認長1.72m、燃焼部幅0.70m、煙道は壁外に1.23m突出している。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 地山のC黒層（IV層）を掘り込み、褐灰色土により貼床を構築している。重複 H-12と重複し、新旧関係はH-12→本遺構である。出土遺物 高台部が残存する綠釉陶器碗（1）、酸化焰焼成の須恵器塊（2・3）、四面にヘラ記号のある平瓦（4）、判読不能であるがヘラ文字が凸面に描かれた平瓦（5）が出土している。また、住居北東に馬と考えられる獸骨を、ほぼ一頭分検出している。時期 土遺物から10世紀前半から中頃と考えられる。

H-24号住居跡 (Fig.21, PL. 6)

位置 X107・108、Y199・200 主軸方向 N-91°-E 規模 東西軸(2.06)m、南北軸(2.64)m、壁現高0.29m。調査区北東で検出。上部はカクランにより削平され、浅い住居となっている。面積 (6.75) m² 床面 カマド前から住居中央にかけて硬化する。カマド 東壁に1基検出した。確認長2.86m、煙道は壁外に1.68m突出している。削平により、焼土面のみの検出である。カマド前には焼土粒・炭化物が広がる。貯蔵穴 長軸0.68m、短軸0.63m、深さ0.43mを測る、平面隅丸方形の貯蔵穴がカマド南東部で検出された。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H-2・4、D-4と重複し、新旧関係はD-4→本遺構→H-4→H-2である。出土遺物 土師器壺の小破片が2点、貯蔵穴覆土から出土しているのみである。時期 重複関係や出土遺物から8世紀代と考えられる。

H-25号住居跡 (Fig.21・22・28, PL. 6・12)

位置 X108・109、Y200・201 主軸方向 N-97°-W 規模 東西軸2.16m、南北軸(2.88)m、壁現高0.40m。住居南端は調査区外となる。面積 (5.84) m² 床面 カマド前を中心として、全体的に硬化する。カマド 西壁北寄りに1基検出した。確認長0.66m、燃焼部幅0.24m、煙道は壁外に0.33m突出している。両袖ともに残存しないが、袖石を据え付けたと思われる掘り込みが確認された。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。部分的に暗褐色土により構築されている。重複 H-4・33・34、D-8と重複し、新旧関係はH-4・33・34→本遺構→D-8である。出土遺物 床面直上から灰釉陶器碗（1）、皿（2）、酸化焰焼成の須恵器塊（3）が出土している。時期 出土遺物から10世紀後半と考えられる。

H-26号住居跡 (Fig.22・28, PL. 7・12)

位置 X113・114、Y200・201 主軸方向 N-116°-E 規模 東西軸3.28m、南北軸(2.39)m、壁現高0.29m。住居南半は調査区外となる。面積 (4.64) m² 床面 全面的に硬化しており、住居中央付近が特に顕著である。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層、部分的に先行する遺構の覆土を掘り込んで床面とする。重複 H-3・22・27、D-3と重複し、新旧関係はH-3・27→本遺構→H-22、D-3である。出土遺物 八稜鏡（1）、灰釉陶器碗（2・3）が出土している。1は瑞花双鳥（鳳）八稜鏡で、完形品である。湯口は丁寧に整形されている。時期 出土遺物から10世紀後半と考えられる。

H-27号住居跡 (Fig.23・28, PL. 7・12)

位置 X114・115, Y200・201 主軸方向 N - 88° - E 規模 東西軸 5.60 m、南北軸 4.08 m、壁現高 0.40 m。面積 18.9 m² 床面 全体的に平坦な床面で、カマド前から住居中央にかけての硬化が顕著である。ほぼ全周にわたり周溝が巡る。カマド 東壁中央に1基検出した。確認長1.81 m、燃焼部幅0.59 m、袖の残存長は左(北)が1.01 m、右(南)が1.25 mを測る。煙道は壁外に0.49 m突出している。両袖ともに灰黄褐色粘質土により構築され、右袖には構築材として凝灰岩質砂岩が見られる。中央には支脚を据えたと思われる掘り込みが確認された。貯蔵穴 検出されず。柱穴 P 1～3 の3基が検出された。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H-22・26, T-1 と重複し、新旧関係は本遺構→H-26→H-22→T-1 である。出土遺物 須恵器壺・甕、土師器壺・甕等が出土しており、カマド覆土から出土した須恵器蓋(1)、床面直上から出土した土師器壺(2)を図示。時期 重複関係や出土遺物から7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

H-28号住居跡 (Fig.22, PL. 7)

位置 X109・110, Y200 主軸方向 N - 83° - E 規模 東西軸 2.27 m、南北軸 (2.35) m、壁現高 0.34 m。調査区西側で検出。住居南半は遺構外となる。面積 (4.17) m² 床面 カマド前から住居中央にかけて、非常に堅緻に硬化する。カマド 東壁に1基検出した。確認長0.58 m、燃焼部幅(0.27) m、煙道は壁外に0.43 m突出している。カマドは浅く、薄い灰層と被熱し赤変した火床面が確認できる程度である。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層および先行する遺構の覆土を掘り込んで床面としている。重複 H-29・30・34・37, D-2・5 と重複し、新旧関係は H-34 → H-37 → H-30 → 本遺構 → H-29, D-2・5 である。出土遺物灰釉陶器碗、酸化焰焼成の須恵器壺、羽釜、平瓦等が住居覆土およびカマド覆土から出土しているが、小破片のため図示に至らず。時期 重複関係や出土遺物から10世紀後半と考えられる。

H-29号住居跡 (Fig.24・28, PL. 7・12)

位置 X109・110, Y199・200 主軸方向 N - 105° - E 規模 東西軸 2.04 m、南北軸 2.50 m、壁現高 0.45 m。調査区西側で検出した。全面検出であるがカマドが検出されず、灰層の広がりや火床面も確認されなかった。住居として扱っているが、堅穴状遺構となる可能性も考えられる。面積 5.09 m² 床面 平坦な床面で、部分的に硬化が見られる。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H-1・28・30・32・33, W-5、D-7, P-2・4 と重複し、新旧関係は H-33 → H-32 → H-30 → H-28 → 本遺構 → W-5, D-7, P-2・4 である。出土遺物 灰釉陶器碗、羽釜、平瓦等が出土しており、覆土中から出土した酸化焰焼成で底部回転糸切りの須恵器壺(1)を図示した。時期 重複関係や出土遺物から10世紀後半と考えられる。

H-30号住居跡 (Fig.24, PL. 7)

位置 X211～213, Y124～126 主軸方向 N - 60° - E 規模 東西軸 5.67 m、南北軸 5.73 m、壁現高 0.34 m。調査区西側で検出した。面積 11.04 m² 床面 全面的に硬化しており、南東から中央にかけて特に顕著である。ほぼ全周にわたり周溝が巡る。カマド 検出されず。硬化面および焼土・灰の散布状況から、住居南東にあったものと考えられる。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H-1・28・29・31・32・36・37, W-5, D-2・5, P-2・4 と重複し、新旧関係は H-28・31・32・37・36 → 本遺構 → H-29 → H-1, W-5, D-2・5, P-2・4 である。出土遺物 覆土中から灰釉陶器碗、須恵器蓋・高台付壺(足高高台)、羽釜、平瓦等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。時期 重複関係や出土遺物から10世紀後半と考えられる。

H-31号住居跡 (Fig.22・29, PL. 7・12)

位置 X110・111, Y200 主軸方向 N - 107° - E 規模 東西軸 (2.63) m、南北軸 (2.90) m、壁現高 0.46 m。調査区西側で検出した。面積 (10.01) m² 床面 全面的に平坦な床面で、全体的に強く硬化する。カマ

ド 検出されず。南東隅に焼土・灰の散布が見られ、後出するD-6に削平された可能性が考えられる。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複H-1・30・35・36、W-4、D-5・6と重複し、新旧関係はH-35・36→本遺構→H-30→H-1、W-4、D-5・6である。出土遺物 灰釉陶器碗、酸化焰焼成の須恵器高台付塊、羽釜等が覆土中から出土している。詳細は不明な鉄製品（1）を図示した。形状から光背の可能性が考えられる。時期 重複関係や出土遺物から10世紀後半と考えられる。

H-32号住居跡 (Fig.24・29, PL. 7・12)

位置 X109・110、Y199・200 主軸方向 N-103°-E 規模 東西軸3.03m、南北軸2.22m、壁現高0.29m。調査区西側で検出、住居北西隅は調査区外となる。カマドが検出されず、灰層の広がりや火床面も確認されなかつた。住居として扱っているが、竪穴状遺構となる可能性も考えられる。面積 (5.81) m² 床面 平坦な床面で、全体的に硬化が認められる。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H-29・30・33・34、W-5、D-7、P-4・5と重複し、新旧関係はH-33→H-34→本遺構→H-30→H-29、W-5、D-7、P-4・5である。出土遺物 酸化焰焼成で底部回転糸切りの須恵器塊（1）、鉄製鍊錘車（2）の他、羽釜、平瓦等が出土している。時期 重複関係や出土遺物から10世紀後半と考えられる。

H-33号住居跡 (Fig.24, PL. 7)

位置 X109、Y199・200 主軸方向 N-98°-E 規模 東西軸 (0.75) m、南北軸 (2.54) m、壁現高0.25m。住居北側は調査区外、東・南側は重複により削平され、住居南端の部分的な検出となる。面積 (1.34) m² 床面 平坦であるが、住居隅のためか硬化は弱い。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H-25・32・34と重複し、新旧関係は本遺構→H-32→H-34→H-25である。出土遺物 酸化焰焼成の須恵器塊等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。時期 重複関係や出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

H-34号住居跡 (Fig.24, PL. 7)

位置 X109、Y200 主軸方向 N-92°-E 規模 東西軸5.67m、南北軸5.73m、壁現高0.48m。調査区西側で検出、住居南側は調査区外となる。面積 (6.56) m² 床面 全面的に硬化しており、南東から中央にかけて特に顕著である。カマド 東壁に1基検出した。確認長0.47m、燃焼部幅(0.19)m、煙道は壁外に0.38m突出している。カマドは浅く、薄い灰層と被熱し赤変した火床面が確認できる程度である。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。カマド南東に長軸0.81m、短軸0.77m、深さ0.51mを測る、平面円形の床下土坑を検出した。最上層は住居の硬化床となっており、非常に堅緻である。重複 H-25・28・30・32・33・37、D-2・7・8・9と重複し、新旧関係はH-33→本遺構→H-25・32・37→H-28→H-30→D-2・7・8・9である。出土遺物 住居覆土および床下土坑覆土から灰釉陶器碗、長頸壺、酸化焰焼成の須恵器塊等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。時期 重複関係や出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

H-35号住居跡 (Fig.22, PL. 7)

位置 X110・110、Y200 主軸方向 N-98°-E 規模 東西軸3.66m、南北軸 (2.71) m、壁現高0.45m。住居北半の検出である。面積 (3.12) m² 床面 全面的に硬化しており、調査区際が最も硬化が強くなっている。カマド 検出されず。硬化面および焼土・灰が住居南東に広がることから、後出するD-6に削平された可能性が考えられる。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H-30・31・36、D-5・6と重複し、新旧関係は本遺構→H-36→H-31→H-30→D-5・6である。出土遺物 酸化焰焼成の須恵器塊等が出土しているが、小破片のため図示に至

らず。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀中頃と考えられる。

H-36号住居跡 (Fig.22, PL. 7)

位置 X110・111、Y199・200 主軸方向 N - 114° - E 規模 東西軸 (3.14) m、南北軸 (3.51) m、壁現高 0.34 m。調査区西側で検出。住居北側は調査区外、西側は後にする遺構に削平される。面積 (4.62) m² 床面 住居中央付近の硬化が顕著である。カマド 検出されず。住居東壁に極めて薄い灰層と被熱し赤変した火床面が確認できるが、形状把握には至らず。後する H-35 による削平か。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H-30・31、D-5 と重複し、新旧関係は本遺構→H-31→H-30→D-5 である。出土遺物 酸化塩焼成の須恵器塊等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀中頃と考えられる。

H-37号住居跡 (Fig.22, PL. 7)

位置 X109・110、Y200 主軸方向 N - 102° - E 規模 東西軸 (1.73) m、南北軸 (1.38) m、壁現高 0.12 m。調査区西側で検出。住居南側は調査区となる。面積 (2.14) m² 床面 カマド前から住居中央にかけて、非常に堅密に硬化する。カマド 東壁に 1 基検出した。確認長 0.31 m、燃焼部幅 (0.29) m、煙道は壁外に 0.25 m 突出している。カマドは浅く、薄い灰層と被熱し赤変した火床面が確認できる程度である。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。重複 H-28・34、D-2・5 と重複し、新旧関係は H-34 → 本遺構 → H-28 → D-2・5 である。出土遺物 なし。 時期 重複関係から 10 世紀中頃と想定される。

(2) 壑穴状遺構

T-1号壗穴状遺構 (Fig.20, PL. 6)

位置 X113・114、Y200 主軸方向 N - 87° - E 規模 東西軸 3.08 m、南北軸 (0.82) m、壁現高 0.78 m。調査区西側の北壁沿いで検出。大半は調査区となる。形状等 平面は長方形である。直線的に落ち込み、総社砂層面まで掘り込んでいる。全体的に平坦な底面で、硬化は認められない。覆土には拳大の総社砂層ブロックが大量に含まれる。重複 H-22・27 と重複し、新旧関係は H-27 → H-22 → 本遺構である。出土遺物 須恵器塊の小破片が 1 点出土しているのみである。 時期 出土遺物が僅少で判然としないが、重複関係等から中世以降と想定される。

(3) 溝跡

W-1号溝跡 (Fig.25, PL. 7)

位置 X119・120、Y208～210 主軸方向 N - 79° - E 規模 長さ (3.50) m、上幅 (9.30) m、下幅 0.57 m、深さ 3.76 m。調査時は深さ 1 m 程度の掘削に留め、埋め戻し時に調査区東壁に沿って、トレンチ調査を実施した。トレンチ部分は現地での簡易的な測量のため、深さ等はおおよその値である。形状等 東西方向に走行し、断面形状は薙研状を呈する。重複 H-17 と重複し、新旧関係は H-17 → 本遺構である。出土遺物 須恵器高台付碗、平瓦等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。いずれも覆土上層からの出土で、周辺からの混入遺物である。 時期 規模・形状から舊海城に伴う堀跡である。

W-2号溝跡 (Fig.20, PL. 6)

位置 X119、Y203・204 主軸方向 N - 89° - E 規模 長さ (3.59) m、上幅 3.24 m、下幅 2.24 m、深さ 0.68 m。形状等 東西方向に走行し、断面形状は台形を呈する。重複 H-19～20 と重複し、新旧関係は H-19～20 → 本遺構である。出土遺物 須恵器、土師器等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係から中世以降の開削と考えられる。

W-3号溝跡 (Fig.21、PL. 6)

位置 X108、Y119・120 主軸方向 N-6°-W 規模 長さ (2.89) m、上幅 0.78 m、下幅 0.42 m、深さ 0.31 m。 形状等 南北方向に走行し、断面形状は箱形を呈する。覆土には As-B 軽石が少量混入する。 重複 H-4と重複し、新旧関係は H-4 → 本遺構である。 出土遺物 積器、土師器等が数点出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 出土遺物が僅少で判然としないが、重複関係や覆土から中世以降の開削と想定される。

W-4号溝跡 (Fig.25)

位置 X110・111、Y199・200 主軸方向 N-10°-W 規模 長さ (2.50) m、上幅 0.47 m、下幅 0.25 m、深さ 0.15 m。 形状等 南北方向に走行し、断面形状は台形を呈する。浅い溝状の掘り込みであり、D-5 のような土坑の可能性も考えられる。 重複 H-1・31・36 と重複し、新旧関係は H-31・36 → 本遺構 → H-1 である。 出土遺物 灰釉陶器碗、須恵器壺の小破片が各 1 点出土している。 時期 重複関係から 10 世紀末から 11 世紀初頭の開削と想定される。

W-5号溝跡 (Fig.25)

位置 X109・110、Y199・200 主軸方向 N-95°-E 規模 長さ 2.86 m、上幅 0.45 m、下幅 0.18 m、深さ 0.13 m。 形状等 東西方向に走行し、断面形状は台形を呈する。浅い溝状の掘り込みであり、D-5 のような土坑の可能性も考えられる。 重複 H-29・30・32 と重複し、新旧関係は H-29・30・32 → 本遺構である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係から中世以降の開削と想定される。

(4) 井戸跡・土坑・ピット (Fig.17・18・20・21・22・29、PL. 4・7・8・13)

本調査区では井戸跡 1 基、土坑 9 基、ピット 5 基を確認している。D-8 号土坑からは銅鏡 2 面（五花鏡 1 面、素文鏡 1 面）が重なって出土しており、それ以外にも鐵鐸、鐵鉢、4 本の雁又釧等、一般的な遺構では見られないような遺物群が一括して出土している。断面観察から、柱痕は見られないが覆土に焼土ブロックを含み、意図的に埋め戻した様子が窺える。

各計測値については「Tab. 4 2 区井戸跡・土坑・ピット計測表」を参照のこと。

Tab. 4 2 区井戸跡・土坑・ピット計測表

遺構名	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状	重複 (古→新)	出土遺物	備考
I-1	X 119、Y 204	1.05	1.01	0.099	円形		須2、土12	上層に As-B 軽石
D-1	X 119、Y 195・196	2.16	1.80	0.51	椭円形	H-11 → D-1	須1	
D-2	X 109・110、Y 200	1.45	0.98	0.51	椭円形	H-28・37 → D-5 → D-2		
D-3	X 113、Y 200	0.85	0.83	0.23	円形	H-22・26・27 → D-3	須1	
D-4	X 108、Y 199	0.88	0.71	0.65	(椭円形)	D-4 → H-24 → W-3		
D-5	X 110・111、Y 200	3.23	0.79	0.36	楕丸長方形	H-28・30・31・36・37 → D-5+D-2	灰3、須2、土11	
D-6	X 110、Y 200・201	1.65	1.53	0.42	(楕丸長方形)	H-31・35 → D-6	須3	
D-7	X 109、Y 200	0.89	0.82	0.16	不整円形	H-29・32 → D-7	須4、土3	
D-8	X 109、Y 200	0.69	0.68	0.61	円形	H-25・34 → D-8	鏡2、鏡1、鏡2、鏡4	
D-9	X 109、Y 200	0.69	0.58	0.16	不整円形	H-34 → D-9	須1、土10、瓦1	
P-1	X 119、Y 197	0.50	0.45	0.17	円形	H-8 → P-1	灰1、須19、土10	
P-2	X 110、Y 200	0.44	0.44	0.21	円形	H-29・30・36 → P-2	土1	
P-3	X 110、Y 200	0.40	0.36	0.08	円形	H-30 → D-5 → P-3	須1、土1	
P-4	X 110、Y 200	0.46	0.26	0.44	椭円形	H-29・30 → P-4		
P-5	X 109、Y 200	0.28	0.28	0.33	不整円形	H-32 → P-5		

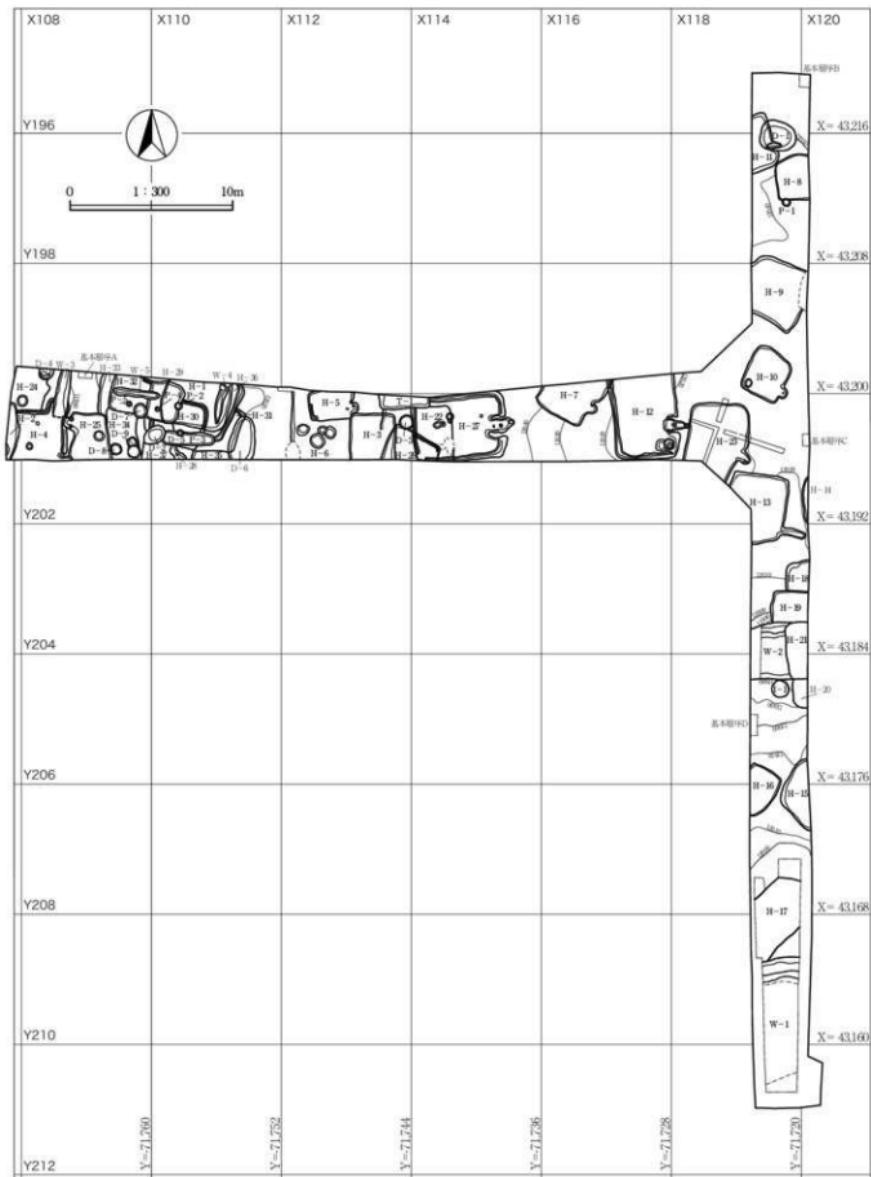


Fig.14 2区 全体図

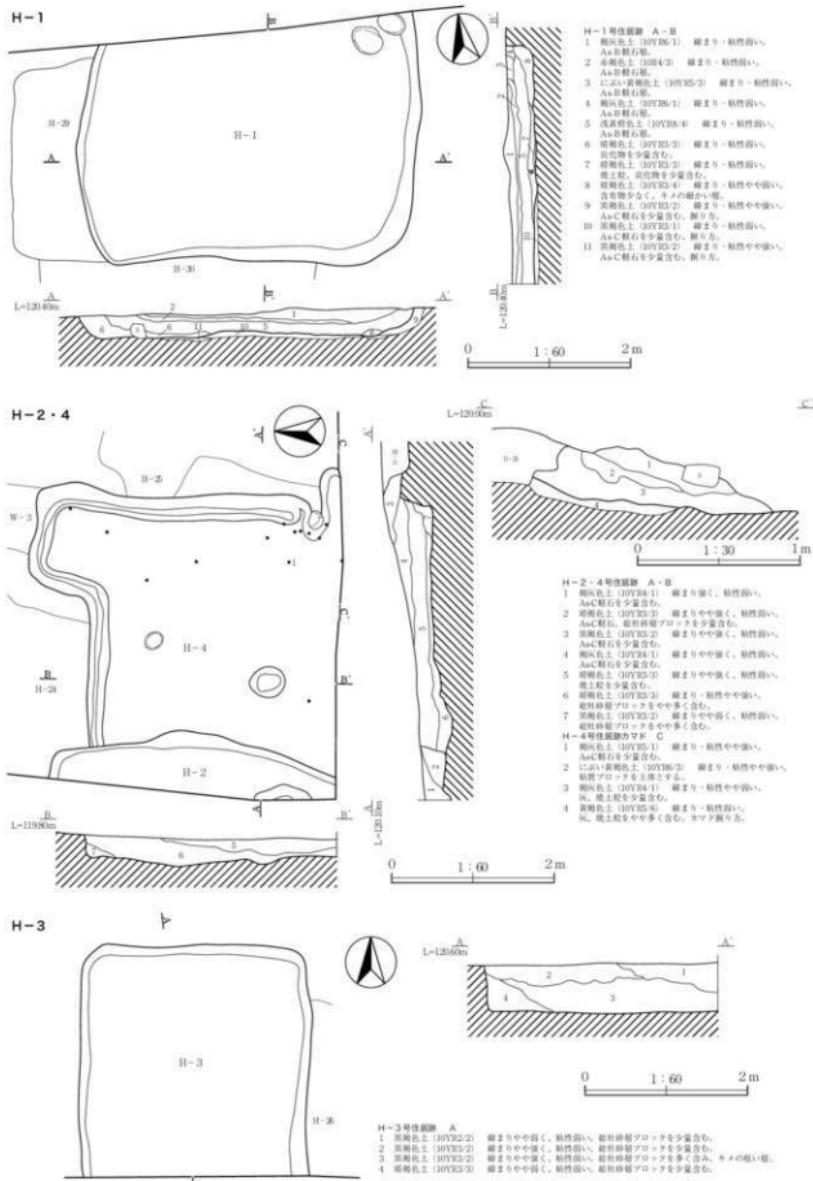


Fig.15 2区 H-1～4号住居跡

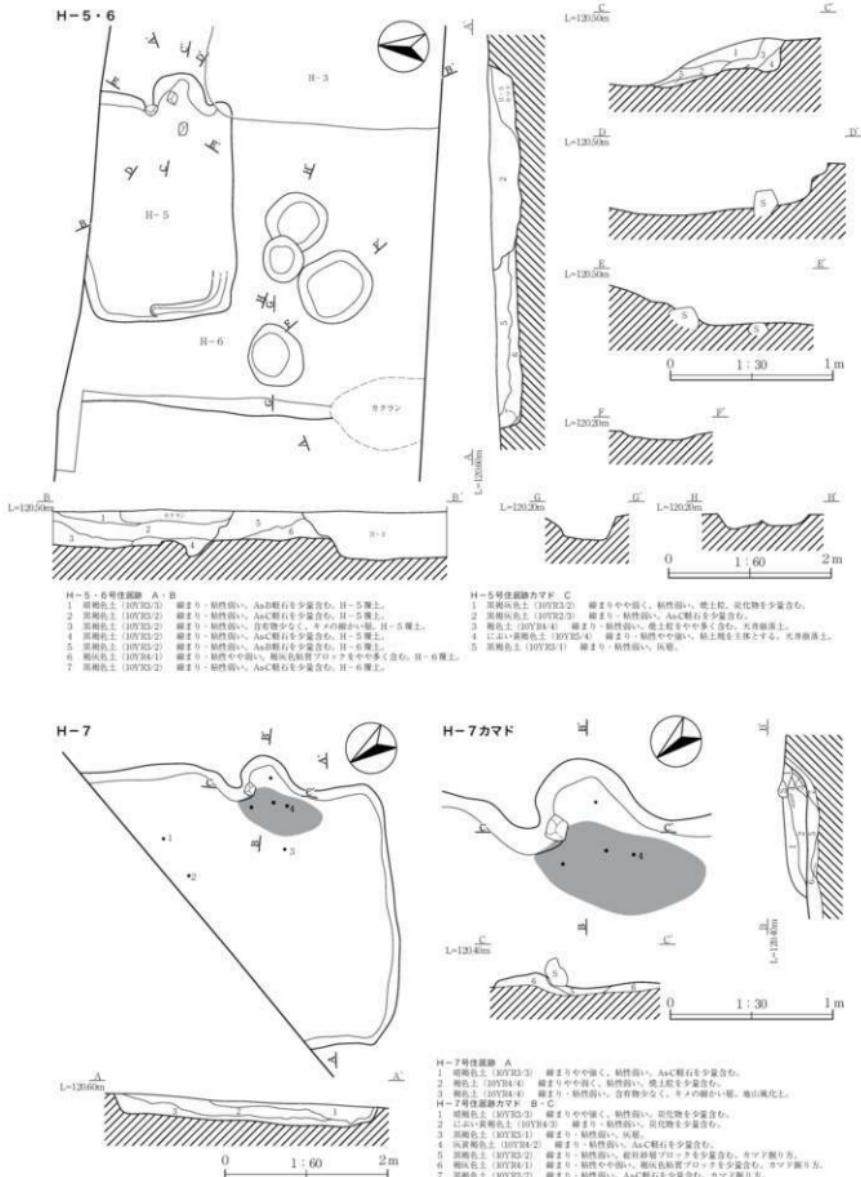
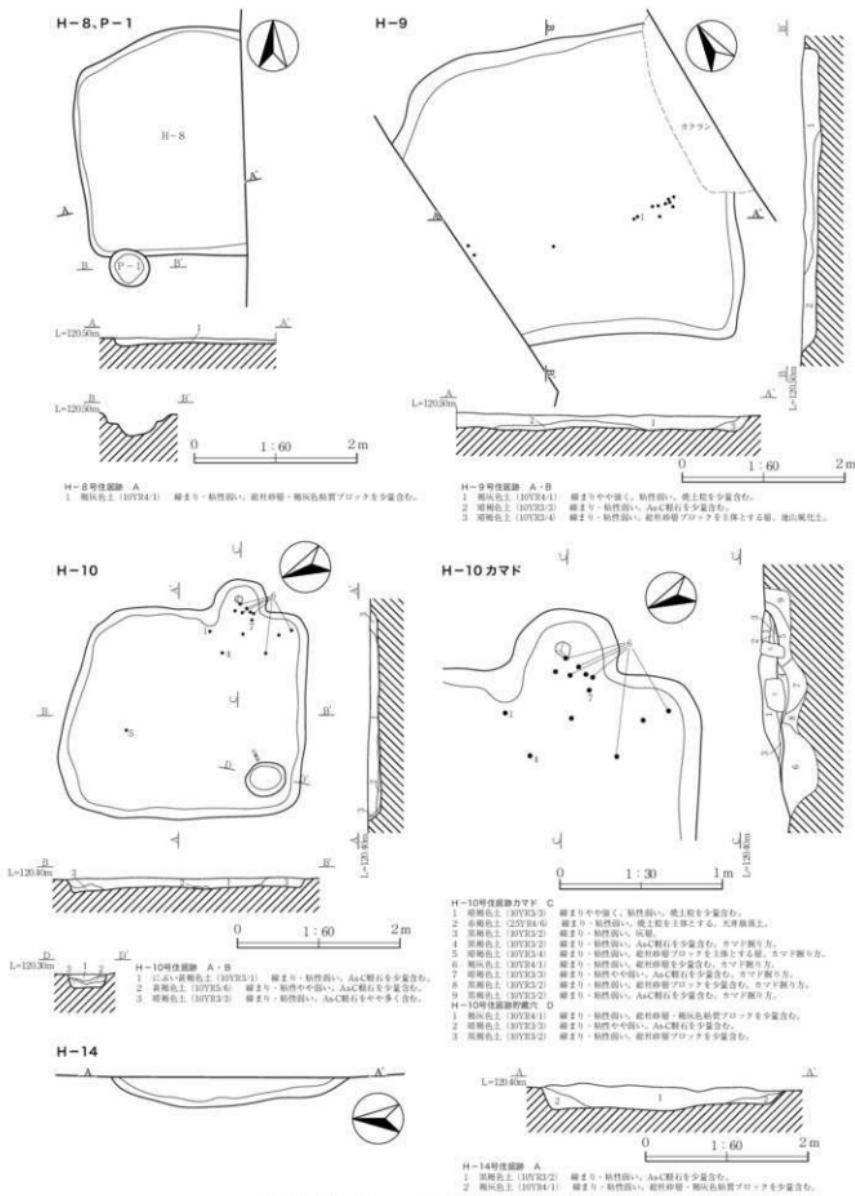


Fig16 2区 H-5～7号住居跡



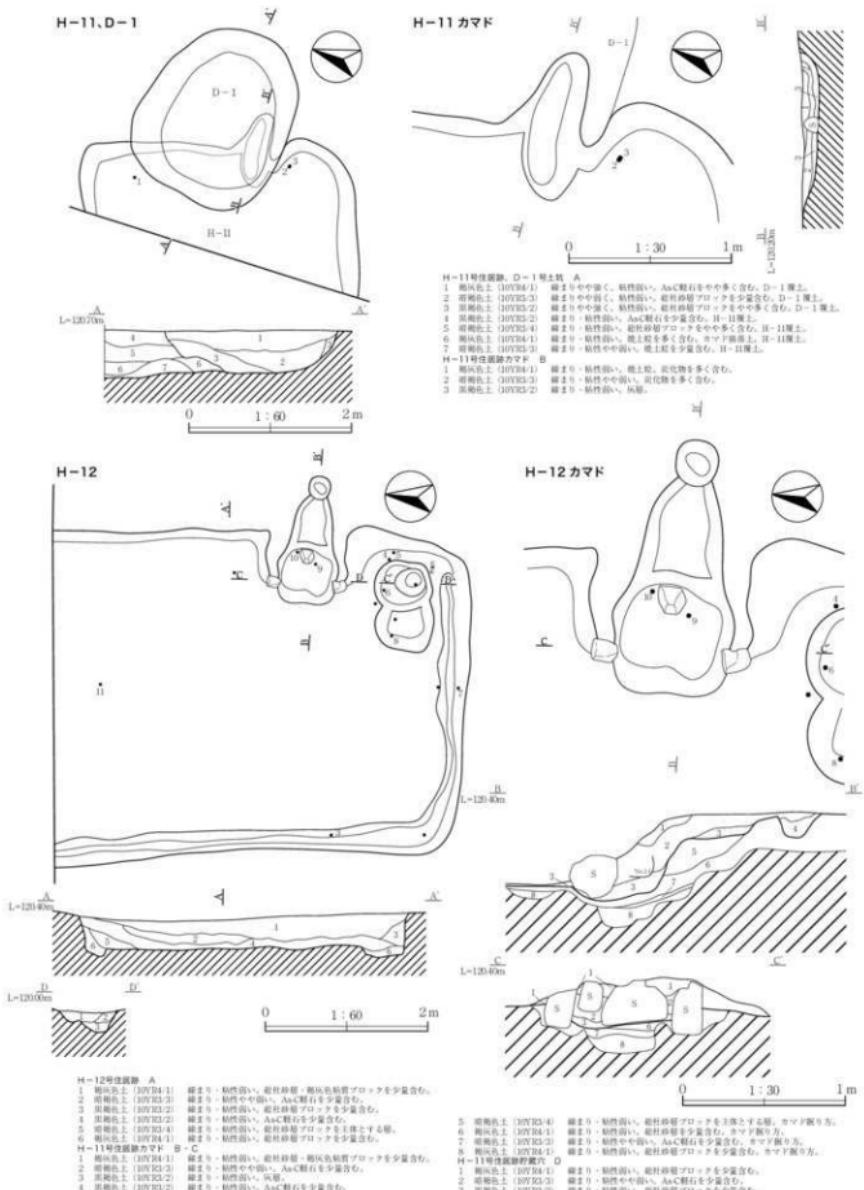


Fig.18 2区 H-11・12号住居跡・D-1号土坑

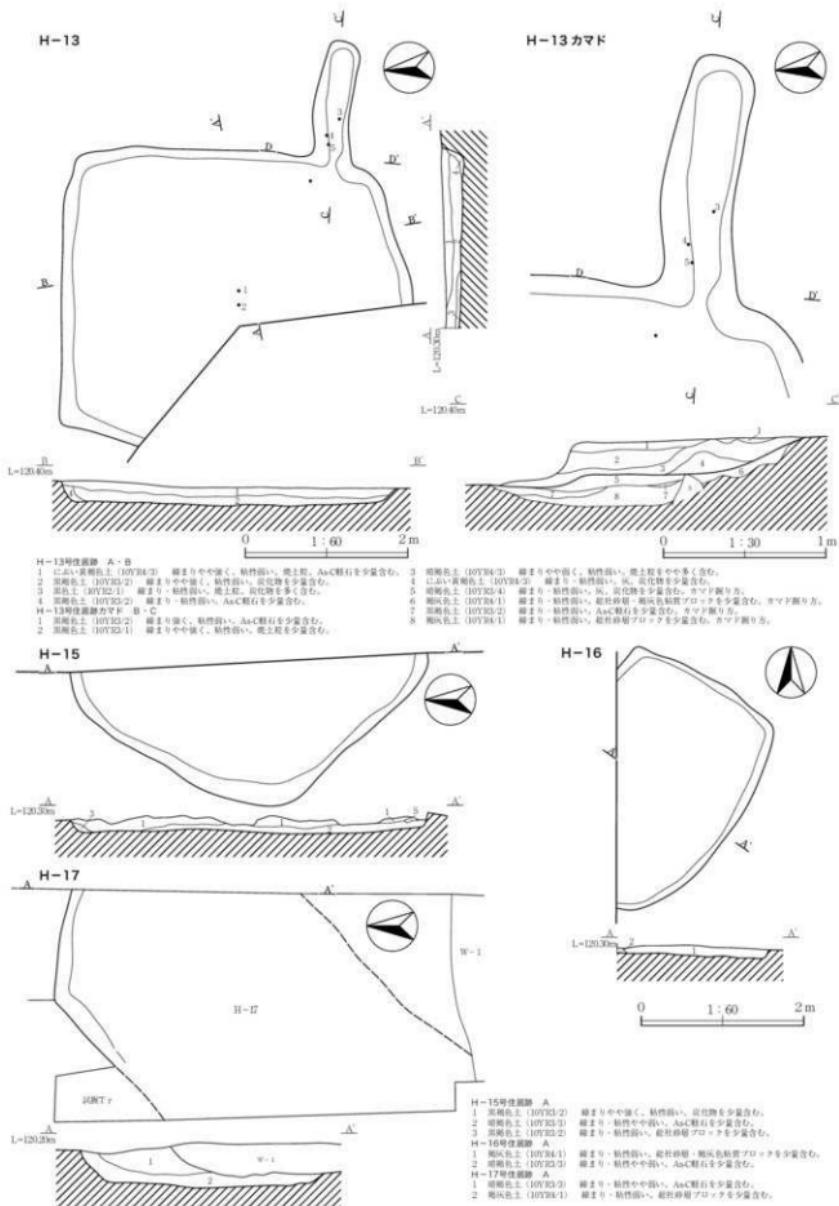


Fig.19 2区 H-13・15～17号住居跡

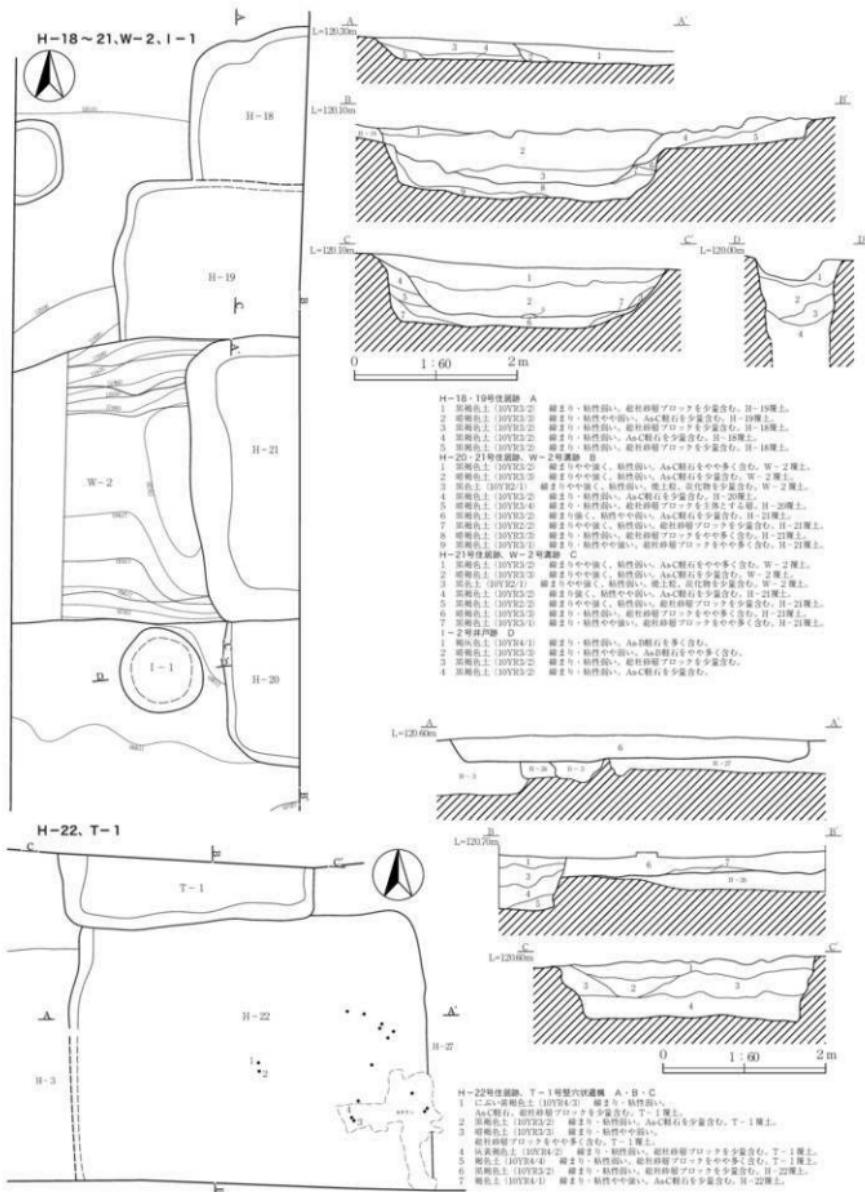


Fig20 2区 H-18 ~ 22号住跡, T-1号豎穴道構造, W-2号溝跡, I-1号井井路

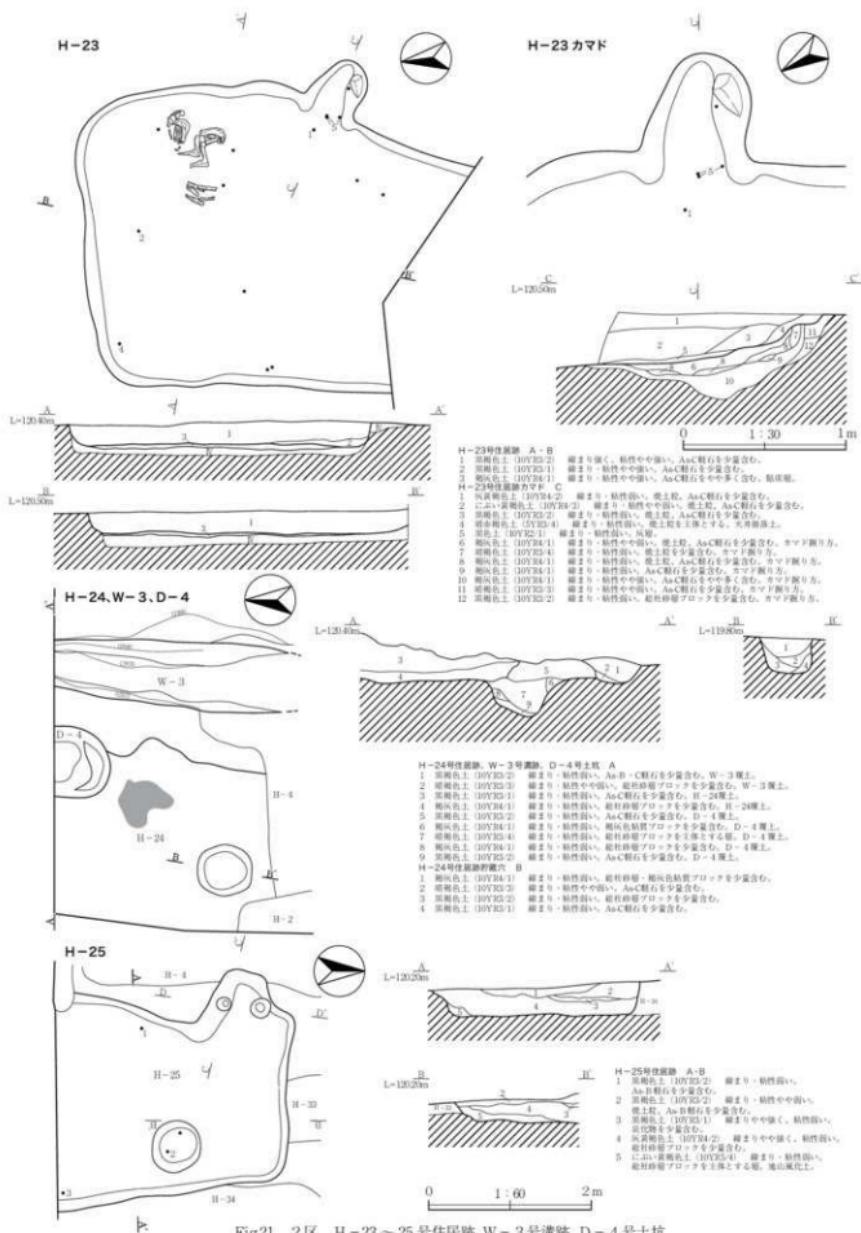
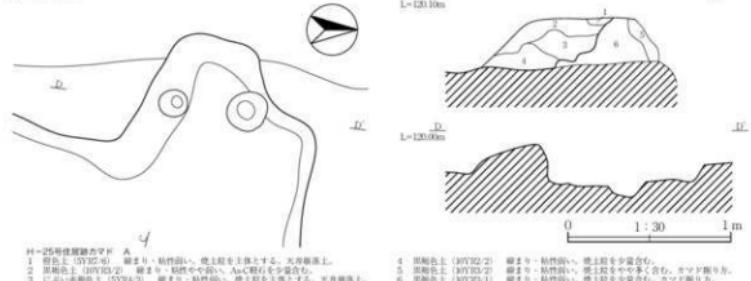
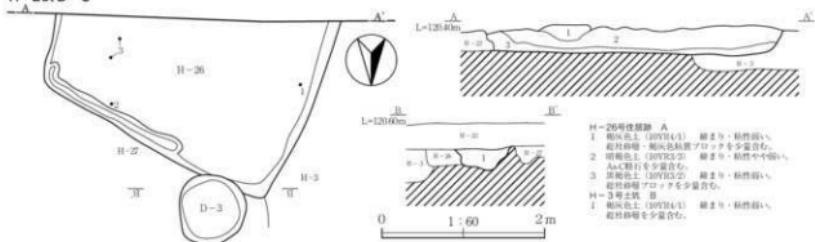


Fig21 2区 H-23～25号住居跡、W-3号溝跡、D-4号土坑

H-25 カマド



H-26, D-3



H-28・31・35～37, D-2・5・6, P-3

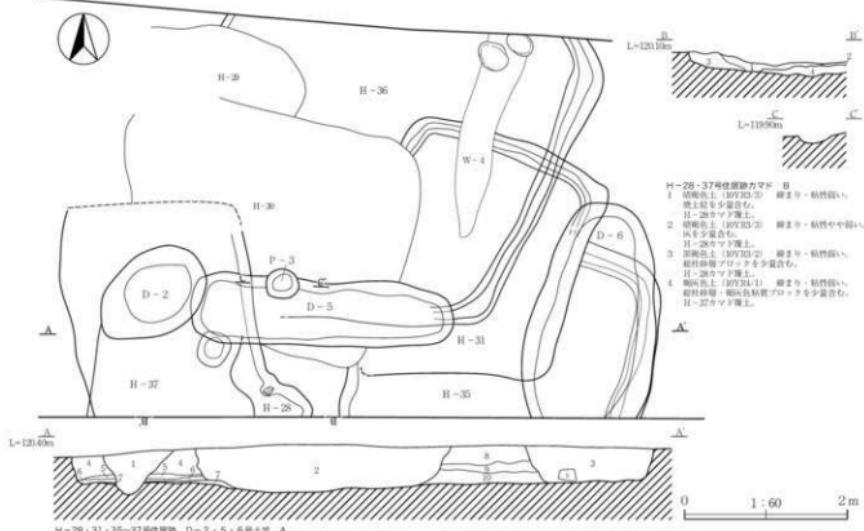
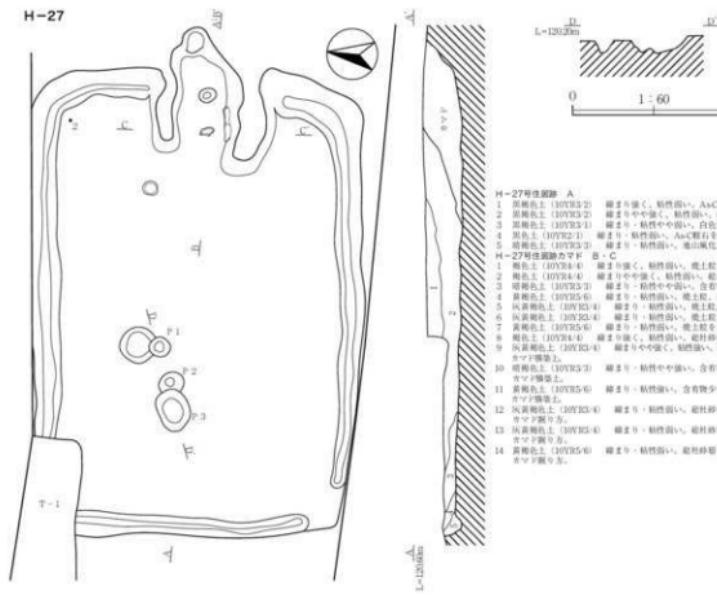


Fig22 2区 H-25・26・28・31・35～37号住居跡、D-2・3・5・6号土坑、P-3号ピット

H-27



H-27号住跡 A

- 1 塵穢地土 (HOT3-2) 糙まり強く、粘性高い。AsxC鉱石を少量含む。
 - 2 塘底土 (HOT3-3) 糙まり強く、粘性高い。AsxC鉱石を少量含む。
 - 3 黑褐色土 (HOT3-4) 糙まり、粘性中弱い。白色粘土を少量含む。
 - 4 黑色土 (HOT2-1) 糙まり、粘性弱い。AsxC鉱石をやう多く含む。
 - 5 黑褐色土 (HOT2-3) 糙まり、粘性弱い。黑色風化土。
- H-27号住跡 B・C
- 1 棕褐色土 (HOT3-4) 糙まり強く、粘性弱い。焼土を少量含む。
 - 2 黑色土 (HOT3-4) 糙まりやや強く、粘性弱い。絶粒砂層ブロックを少量含む。
 - 3 塘底土 (HOT2-2) 糙まり、粘性中弱い。含物物少なくて、土の細かい層。
 - 4 黑褐色土 (HOT2-3) 糙まり、粘性弱い。白色風化土を多く含む。
 - 5 黑褐色土 (HOT2-4) 糙まり、粘性弱い。焼土上、絶粒砂層ブロックを少量含む。
 - 6 黑褐色土 (HOT2-4) 糙まり、粘性弱い。焼土上、白色化物をやう多く含む。
 - 7 黑褐色土 (HOT2-4) 糙まり強く、粘性弱い。絶粒砂層ブロックをやう多く含む。
 - 8 黑色土 (HOT2-4) 糙まり強く、粘性弱い。焼土上、白色化物をやう多く含む。
 - 9 黑褐色土 (HOT2-4) 糙まりやや強く、粘性弱い。含物物少なくて、キノの根へ埋入。カーブ層。
 - 10 黑褐色土 (HOT3-5) 糙まり、粘性やや弱い。含物物少なく、キノの根へ埋入。カーブ層。
 - 11 黑褐色土 (HOT3-5) 糙まり、粘性弱い。含物物少なくて、キノの根へ埋入。
 - 12 黑褐色土 (HOT3-4) 糙まり、粘性弱い。絶粒砂層ブロックを少量含む。カーブ層。
 - 13 黑褐色土 (HOT3-4) 糙まり、粘性弱い。絶粒砂層ブロックをやう多く含む。カーブ層。
 - 14 黑褐色土 (HOT3-6) 糙まり、粘性弱い。絶粒砂層ブロックを主体とする層。カーブ層。

H-27 カマド

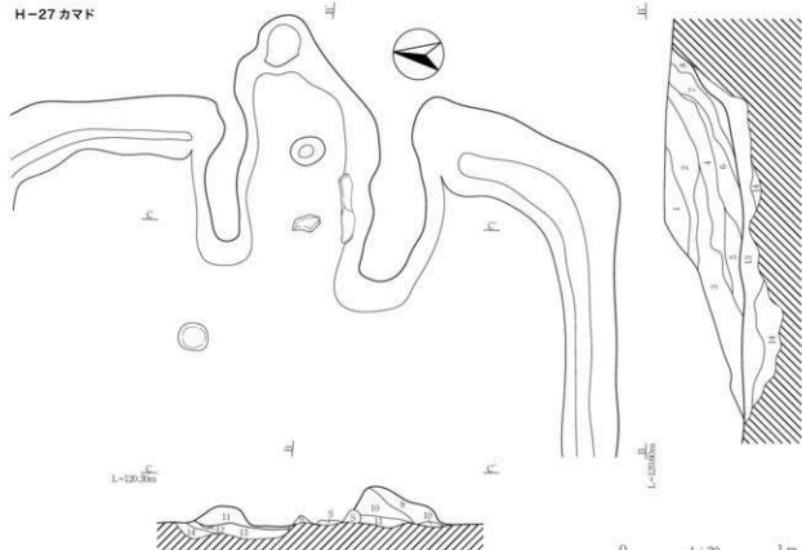
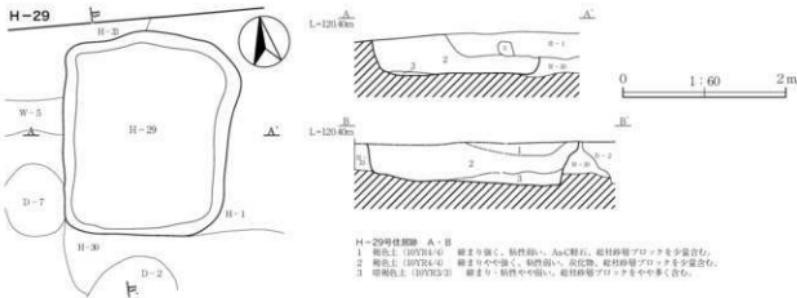


Fig.23 2区 H-27号住跡



H-30・32～34、D-7～9、P-2・4・5

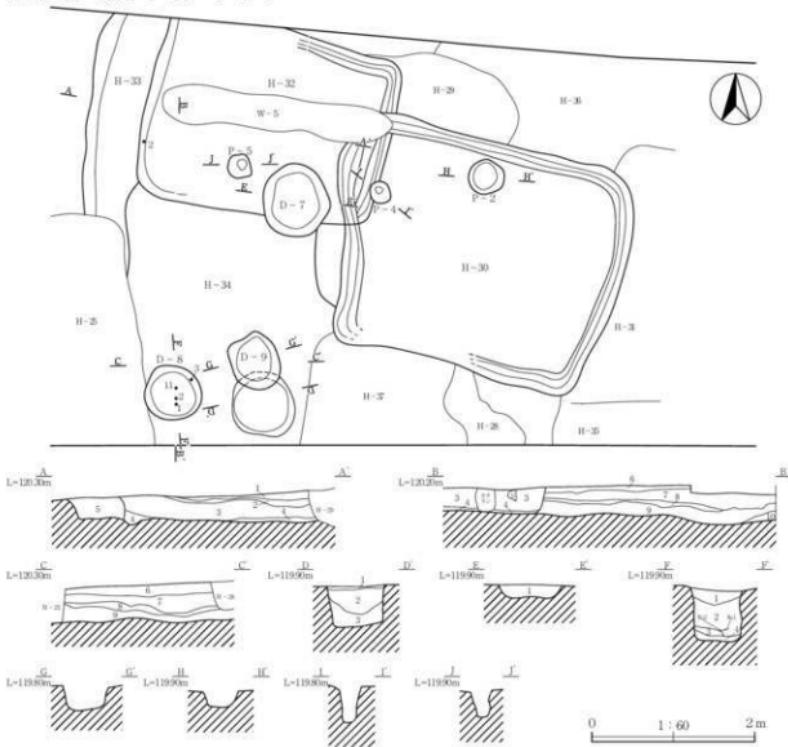


Fig24 2区 H-29・30・32～34号住跡、D-7～9号土坑、P-2・4・5号ピット

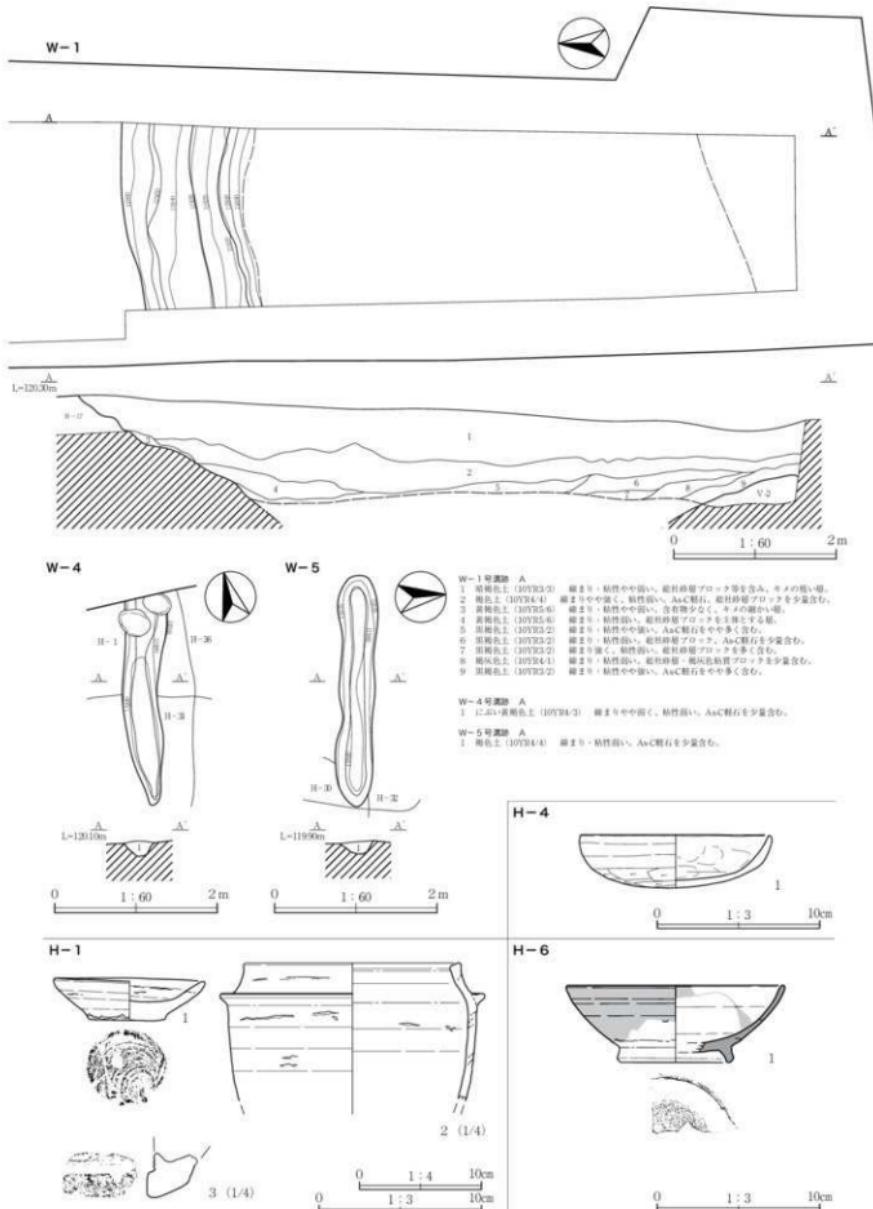


Fig25 2区 W-1・4・5号溝跡、2区出土遺物 (1)

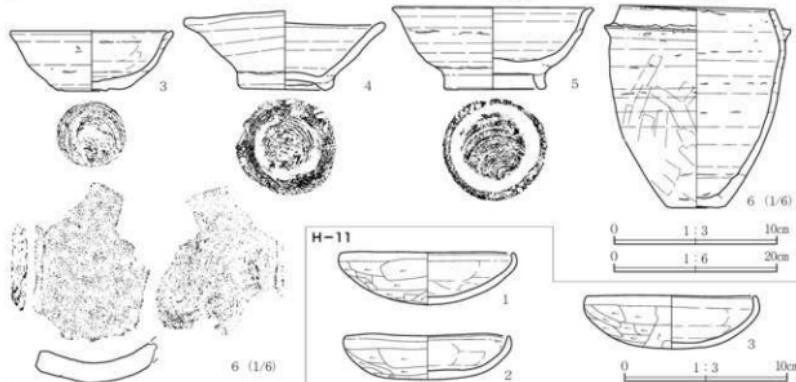
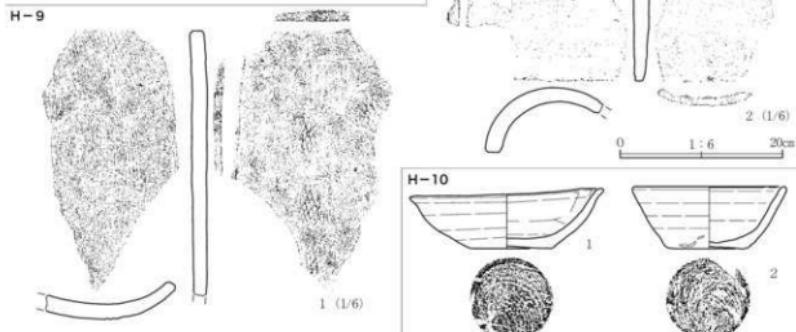
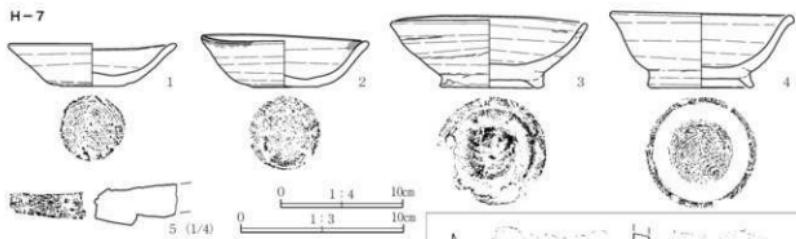
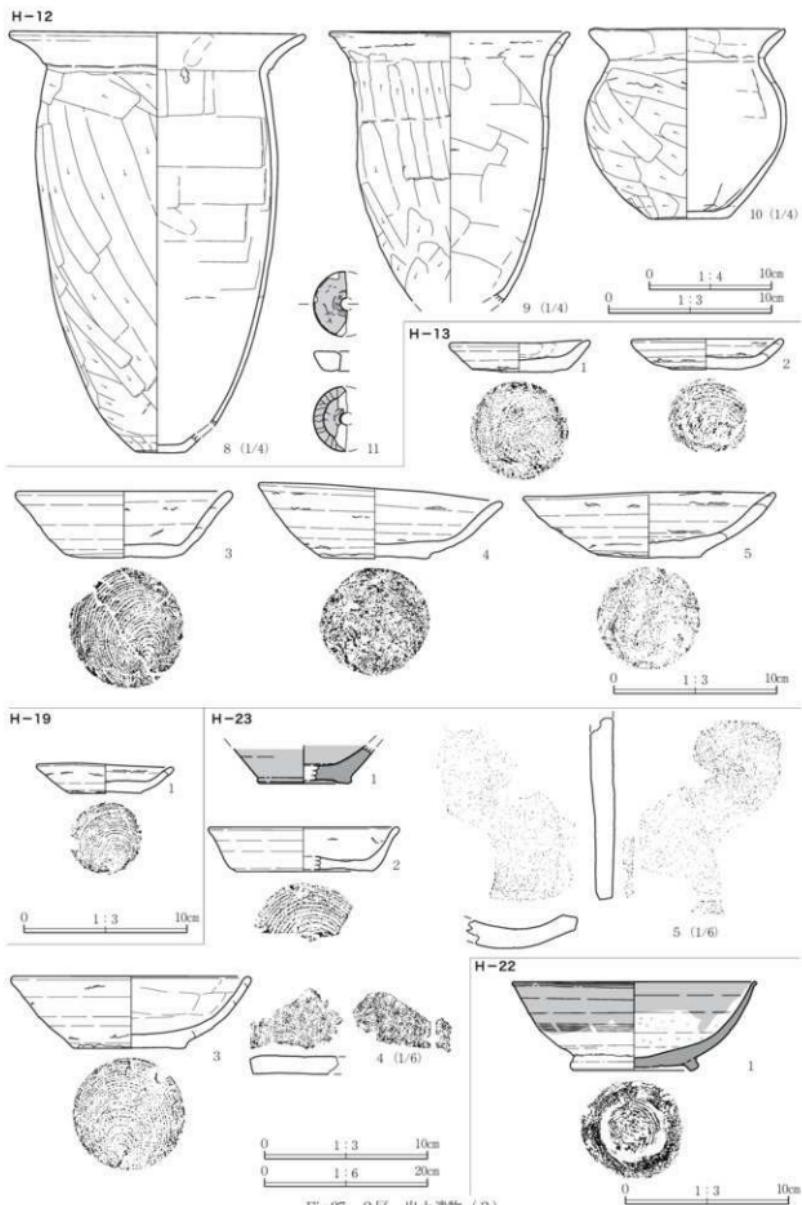


Fig.26 2区 出土遺物(2)



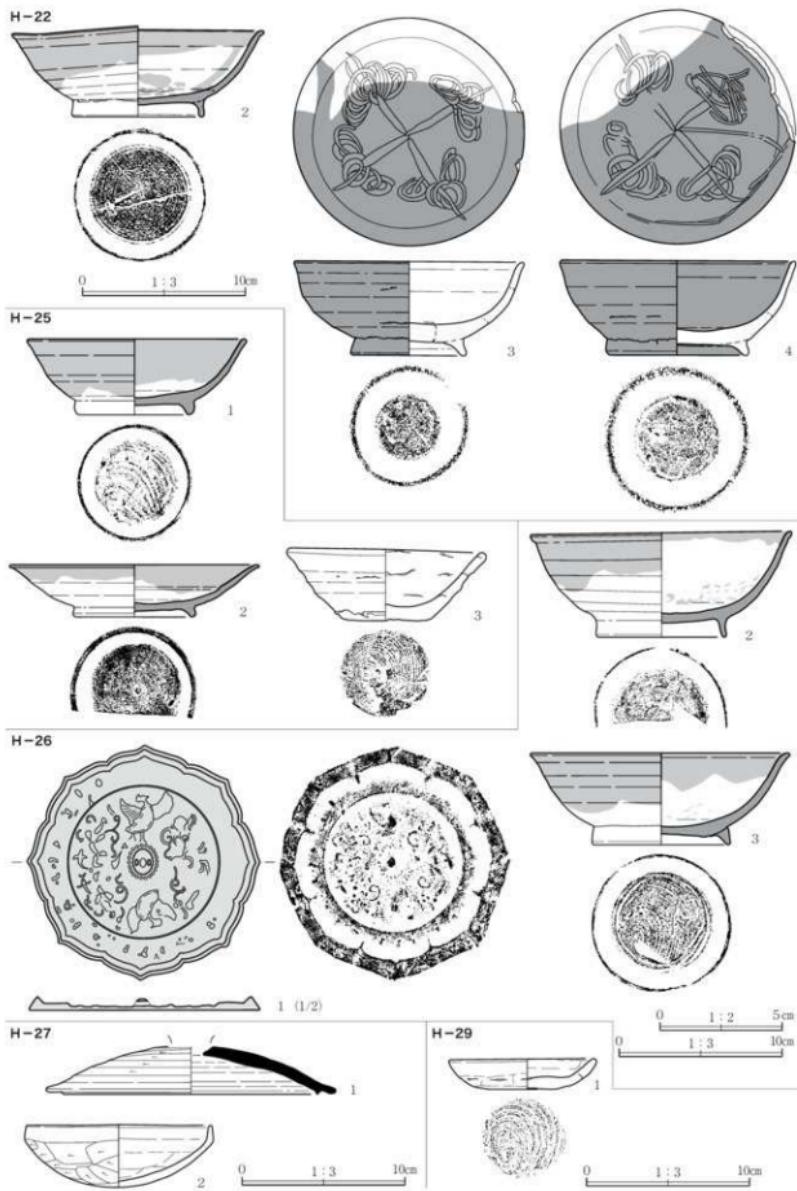
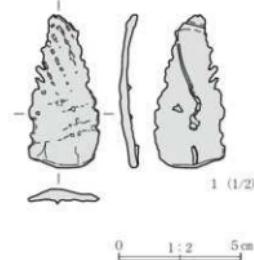
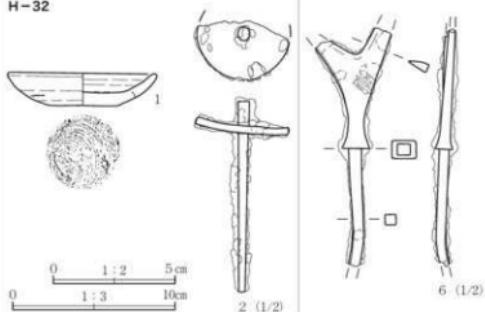


Fig.28 2区 出土遺物 (4)

H-31



H-32



D-8

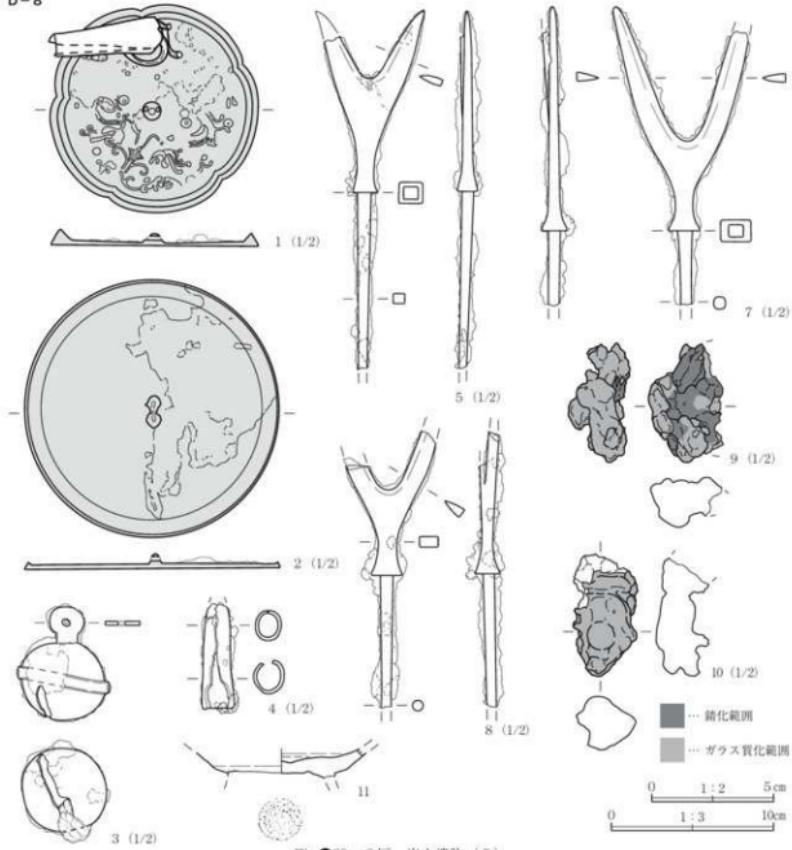


Fig.●29 2区 出土遺物 (5)

Tab. 5 元總社蒼海遺跡群（137）2区出土遺物觀察表

H-1

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
1	夏土	箱形器 瓶	8.2	4.8	28	白色灰	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、底部凹凸あり。	焼成品。完好。		
2	夏土	箱形器 瓶	(12.4)	—	16.0	青灰	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	1/3残存。		
No	出土位置	種別、器種	瓦当幅	瓦当厚	長さ	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
3	夏土	瓦	神瓦	(1.3)	(2.6)	14.2	石灰・熟灰	青灰	内側山腹部に瓦当。表面はナメ無し。	瓦当部。	

H-4

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
1	Se-2	土罐器 瓶	13.8	—	3.8	白色灰	良好	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	完存。	

H-6

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
1	夏土	箱形器 瓶	(12.4)	(7.6)	16	白色灰	良	9.0	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	1/3残存。	

H-7

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
1	Se-6	箱形器 瓶	11.4	4.2	2.2	茶色灰	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	焼成品。3/4残存。		
2	Se-7	箱形器 瓶	10.4	4.8	3.0	赤・茶色灰	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	焼成品。完好。		
3	Se-1	箱形器 高台付	12.7	5.6	4.8	白色灰・素燒	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	焼成品。4/5残存。		
4	Se-2	箱形器 高台付	11.4	4.4	4.8	白色灰・素燒	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	焼成品。3/4残存。		
No	出土位置	種別、器種	瓦当幅	瓦当厚	長さ	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
5	夏土	瓦	神瓦	(1.0)	2.0	(5.2)	石灰・熟灰	青灰	内側山腹部に瓦当。表面はナメ無し。	瓦当部。	

H-9

No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
1	Se-4・6	瓦	7.8	(3.1)	(1.6)	1.8	石灰・熟灰	良	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	瓦当部。	
2	夏土	瓦	8.0	(1.6)	(1.6)	1.8	石灰・熟灰	良	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	瓦当部。	

H-10

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
1	Se-2	箱形器 瓶	22.0	5.8	4.8	茶・赤色灰	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	焼成品。完好。		
2	夏土	箱形器 瓶	(19.8)	4.9	4.0	茶色灰	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	焼成品。1/3残存。		
3	夏土	箱形器 瓶	(19.8)	4.0	3.8	素燒	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	焼成品。1/3残存。		
4	Se-1	箱形器 高台付	21.1	5.8	4.4	素燒	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	焼成品。完好。		
5	Se-24	箱形器 瓶	22.4	6.0	5.4	茶・赤色灰	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	焼成品。完好。		
6	Se-8・7・8 10・11・12・13	箱形器 瓶	18.9	7.2	2.6	素燒	良好	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	1/2残存。		
No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
7	Se-4	瓦	8.0	(2.0)	(1.6)	2.8	石灰・熟灰	良	内側山腹部、底面ハタケアリ。	瓦当部。完・缺少不明。	

H-11

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
1	Se-1	箱形器 瓶	10.4	—	5.2	赤色灰・素燒	良好	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	完存。	
2	Se-2	箱形器 瓶	10.4	—	5.8	赤色灰・素燒	やや劣化	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	完存。	
3	Se-3	箱形器 瓶	10.4	—	5.3	赤色灰・素燒	やや劣化	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	完存。	

H-12

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
1	夏土	箱形器 瓶	(18.6)	—	12.0	白色灰・素燒	良好	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	1/4残存。残み不明。	
2	カマダ裏土	箱形器 瓶	—	14.2	10.2	熟灰	良	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	子供手から乱擦れ。	
3	Se-2・8	土罐器 瓶	12.7	—	4.6	素燒	良好	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	完存。	
4	Se-10	土罐器 瓶	12.6	—	5.4	白色灰・素燒	良好	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	はげ缺。	
5	Se-1	土罐器 瓶	(12.6)	—	6.0	素燒	良好	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	1/3残存。	
6	Se-3・4	土罐器 瓶	12.0	—	5.7	白・赤色灰・素燒	良好	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	完存。	
7	Se-9	土罐器 瓶	11.8	—	4.9	白色灰・素燒	良好	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	はげ缺。	
8	Se-7	土罐器 瓶	11.6	—	4.6	白色灰・素燒	良好	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	はげ缺。	
9	Se-14	土罐器 瓶	10.7	—	5.0	白・赤色灰・素燒	良好	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	2/3残存。	
10	Se-15	土罐器 瓶	10.0	0.2	15.8	素燒	良好	壁	内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ、内側山腹部コリナフ、底面ハタケアリ。	2/3残存。	
No	出土位置	種別、器種	上径	下径	乳突	厚さ	石材	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考	
11	Se-12	古墳器 破片	—	—	—	1.27	滑石	白・青白	内側山腹部、底面ハタケアリ。内側山腹面は既に削られた状態による。僅かな剥離をもつて残されている。	1/2残存。	

H- 13

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.5	直底盤 瓦	8.7	5.8	1.8	白色系、素面	高炉	褐	内側にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	難燃性、定期。
2	No.6	直底盤 瓦	9.8	6.0	1.8	白色系、素面	高炉	褐	内側にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	難燃性、1次焼成。
3	No.1	直底盤 瓦	14.1	6.0	1.7	素面	中古焼	内側にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	難燃性、1次焼成。	
4	No.2	直底盤 瓦	15.0	6.7	1.6	石英、素面	高炉	灰青褐	内側にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	難燃性、定期。
5	No.3	直底盤 瓦	15.0	6.0	3.9	白色系	高炉	灰青褐	内側にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	難燃性、定期。

H- 19

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	裏手	直底盤 瓦	8.6	7.5	1.8	白色系、素面	高炉	灰青褐	内側にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	難燃性、定期。

H- 22

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.1	直底盤 瓦	11.0	8.0	3.4	白色系	塑形	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	1次焼成。
2	No.15	直底盤 瓦	11.6	8.0	3.2	白色系	塑形	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	定期。
3	No.16	直底盤 高台付瓦	14.1	7.1	3.8	白色系	高炉	灰青褐	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	内側に軸跡状のミヅキ。内側にクリア有り。
4	No.11	直底盤 高台付瓦	13.8	6.6	3.8	白色系	高炉	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	内側に軸跡状のミヅキ。内側にクリア有り。

H- 23

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.6	直底盤 瓦	—	(3.8)	(3.8)	無	塑形	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	未焼成。
2	No.15	直底盤 瓦	11.6	8.0	3.2	白色系	塑形	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	未焼成。
3	No.16	直底盤 高台付瓦	14.1	7.1	3.8	白色系	高炉	灰青褐	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	内側に軸跡状のミヅキ。内側にクリア有り。
4	No.11	直底盤 高台付瓦	13.8	6.6	3.8	白色系	高炉	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	内側に軸跡状のミヅキ。内側にクリア有り。

H- 25

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.1	直底盤 瓦	14.0	7.0	4.2	無	塑形	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	未焼成。
2	No.2	直底盤 瓦	15.0	7.0	3.2	無	塑形	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	未焼成。
3	No.4	直底盤 瓦	14.8	7.0	4.1	無・白色系	高炉	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	未焼成。

H- 26

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	H-2-3	直底 瓦片	95.0 mm	53.0 mm	1.80	無	糊糊	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	未焼成。
2	No.1	直底盤 瓦	14.0	7.0	4.2	無	塑形	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	1次焼成。
3	No.2	直底盤 瓦	15.0	7.0	3.2	無	塑形	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	1次焼成。

H- 27

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	裏手	直底盤 瓦	—	(3.8)	石英、無	高炉	灰白	内側にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	未焼成。頭も欠損。	
2	No.1	直底盤 瓦	11.5	—	3.8	石英	塑形	灰白	内側にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	未焼成。

H- 29

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	裏手	直底盤 瓦	12.8	—	(3.8)	石英、無	高炉	灰白	内側にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	未焼成。頭も欠損。

H- 32

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	裏手	直底盤 瓦	9.0	6.0	2.1	白色系	高炉	灰白	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	未焼成。毛穴。
2	No.1	直底盤 瓦	12.0	—	3.8	白色系	塑形	灰白	内側にコリナテ有り。外側の輪郭有り。内側にクリア有り。	未焼成。

D- 8

No	出土位置	種別、器種	口径	縁高	重量	材質	断面、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.1	直底 瓦片	95.0 mm	6.0 mm	342.0	素鋼	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	定期。
2	No.2	直底 瓦片	104.0 mm	2.0 mm	115.4	素鋼	内側にコリナテ有り。口部にコリナテ有り。外側の輪郭有り。胎体。内側にクリア有り。	定期。
No.出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	重量	断面、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考	
3	No.4	直底盤 瓦	47	18	0.2	25.0	内側に擦痕が付いてる。	定期。
4	裏手	直底盤 瓦	43	13	0.2	9.0	上部は黒化して剥がれ落ちてる。表面は瓦割れがある。	定期検査。
5	裏手	直底盤 瓦片	(147)	(20)	6.0	33.0	多部に瓦割れ、空洞化している。	定期・直視検査。
6	裏手	直底盤 瓦片	(98)	(20)	6.0	15.0	表みあり、基部に瓦割れがある。	定期・直視検査。

No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	重量	蓋形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考		
7	土	須恵器 長文鏡	(22)	5.6	0.1	206	鏡の内側から内輪波状。	光面・基部丸出。		
9	土	須恵器 長文鏡	(22)	5.6	0.1	220	鏡の内側。	光面・基部丸出。		
19	土	鏡	6.8	10	1.0	17.3	伝統的口モノス模様が鏡面。	縦片。		
20	土	鏡	2.0	2.6	2.1	21.6	伝統的口モノス模様が鏡面。	縦片。		
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	蓋形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
11	土	須恵器 高台付塊	—	—	2.1	白色灰	良好	褐色	須恵器鏡面ヨコナギ、口モノスヨコナギ、底面ヨコナギ、胎土ヨコナギ等。	須恵器、高台丸出。

VI　まとめ

今回の発掘調査では、1区で住居跡8軒・溝跡1条・井戸跡2基・土坑19基・ピット27基、2区で住居跡37軒・溝跡5条（1条は舊海域の堀跡）・竪穴状造構1基・井戸跡1基・土坑19基・ピット27基を検出した。

1区

1区では6世紀後半から7世紀前半頃にかけての住居跡が4軒検出された。確実に規模が判明したのは1辺5mを超えるH-2号住居跡のみであるが、他の住居跡も同様の規模を持っていたものと想定される。H-2号住居跡では北東柱穴（P1）上に土師器長胴甕を2個並べた後に他の遺物を遺棄した状況が見られ、対角の住居隅では大型の土師器壺が出土している。また、北壁に沿って多量の焼土塊・炭化物が検出され、検出状況から火災住居というよりは意図的に燃やしたものと考えられ、遺物の出土状況とともに住居廃絶に関わる行為と想定される。8・9世紀にかけては空白期間となり10世紀になって集落が再び展開し、10世紀前半から中頃にかけての住居跡を4軒検出した。

2区

2区で検出した遺構は上述の通りであるが、H-26号住居跡から五稜鏡が1面、D-8号土坑から五花鏡1面・素文鏡1面・鉄鎧・鉄鐸・銅津・雁又鏡と、一般的な遺構では見られない特殊な遺物が多数出土している。

H-26号住居跡で出土した五稜鏡は瑞花双鳥（鳳）文で、紐座縁辺には連珠文が巡る。住居南壁近くの床面直上から、鏡背面を上にして出土した。鏡面には僅かに炭化した纖維が付着しており、鏡を包んでいた布痕の可能性が考えられる。同住居跡からの一括遺物として、灰釉陶器碗があり10世紀後半から11世紀初頭にかけての住居跡と考えられる。D-8号土坑からは鉄鎧・銅津・4本の雁又鏡の他、覆土中層から五花鏡と素文鏡が重なった状態で出土した。五花鏡は鉄鎧が1点、鏡により付着している。内区に瑞花文が見られる以外は、鉄鎧と綠青により不明である。素文鏡は円形で圍線が巡るのみである。2面の鏡の下、覆土下層から鉄鎧が1点と酸化塗焼成による須恵器高台付塊が1点出土している。断面観察から自然に埋まつたとは考えられず、意図的な埋納行為の様子が窺われる。出土遺物と重複する他遺構との関連から10世紀後半から11世紀初頭にかけての遺構と想定される。また、H-22号住居からは内面に法輪状の暗文（意匠的に錫杖を放射状に配置したものか）が施された須恵器高台付塊が2点出土している。これらの遺物が出土した遺構は調査区内でも重複の著しい箇所であり、特にD-8号土坑周辺では10世紀中頃から11世紀初頭にかけて短期間のうちに建て替えられた様子が窺え、出土した遺物と相俟って、特異な様相が見て取れる。最終的にはH-1号住居跡で見られたAs-B軽石により埋没し、中世になるまで遺構は確認されなかった。

2区で出土した特徴的な遺物について概観したが、本遺跡周辺でも八稜鏡の出土が確認されている（鳥羽遺跡、元総社寺田遺跡、天神Ⅲ遺跡等）。元総社寺田遺跡Iで坂井隆氏が県内の八稜鏡の分布について検討されており、本遺跡は国府・總社地域となる。また、東山道沿いの遺跡での出土が多いとの指摘もあり（前橋市2008）、本遺跡は東山道沿いの遺跡とも言え、今後の資料増加が期待される地域である。



1区 H-1号住居跡全景（北から）



1区 H-2号住居跡全景（西から）



1区 H-2号住居跡遺物出土状況（北西から）



1区 H-2号住居跡遺物出土状況（西から）



1区 H-2号住居跡遺物出土状況（北から）



1区 H-3号住居跡全景（東から）



1区 H-4~6号住居跡全景（西から）



1区 H-4号住居跡カマド全景（西から）



1区 H-5号住居跡カマド全景（東から）



1区 H-7住居跡、D-10・11号土坑全景（南から）



1区 H-8号住居跡、W-1号溝跡全景（南西から）



1区 I-1号井戸跡全景（南から）



1区 基本層序A（東から）



1区 基本層序B（東から）



1区 基本層序C（南から）



1区 基本層序D（東から）



2区 調査区全景（上が北）



2区 H-1号住居跡全景（南から）



2区 H-1号住居跡覆土堆積状況（南西から）



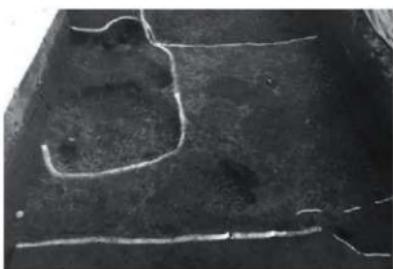
2区 H-2号住居跡全景（北から）



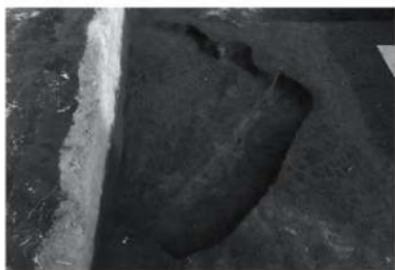
2区 H-3号住居跡全景（西から）



2区 H-4号住居跡全景（西から）



2区 H-5・6号住居跡全景（西から）



2区 H-7号住居跡全景（西から）



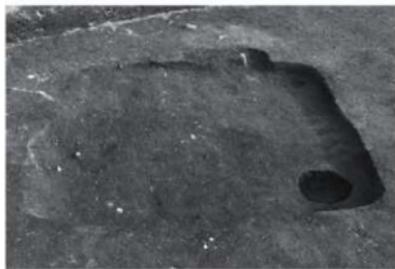
2区 H-7号住居跡カマド全景（北西から）



2区 H-8号住居跡、P-1号ピット全景（西から）



2区 H-9号住居跡全景（西から）



2区 H-10号住居跡全景（西から）



2区 H-10号住居跡カマド全景（西から）



2区 H-11号住居跡、D-1号土坑全景（北西から）



2区 H-11号住居跡カマド全景（西から）



2区 H-12号住居跡全景（西から）



2区 H-12号住居跡カマド全景（西から）



2区 H-13・14号住居跡全景（南西から）



2区 H-13号住居跡カマド全景（西から）



2区 H-15・16号住居跡全景（南から）



2区 H-17号住居跡（南西から）



2区 H-18~21号住居跡、W-2号溝跡全景（南西から）



2区 H-22号住居跡、T-1号竪穴状遺構全景（南から）



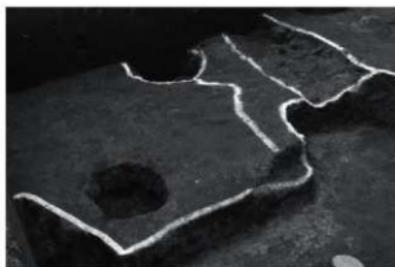
2区 H-22号住居跡遺物出土状況（北西から）



2区 H-23号住居跡全景（西から）



2区 H-23号住居跡獸骨検出状況（南から）



2区 H-24号住居跡、W-3号溝跡全景（南から）



2区 H-25号住居跡全景（東から）



2区 H-25号住居跡カマド全景（東から）



2区 H-26号住居跡全景（西から）



2区 H-26号住居跡遺物出土状況（西から）



2区 H-27号住居跡全景（西から）



2区 H-27号住居跡カマド全景（西から）



2区 H-28・29号住居跡、D-5号土坑全景（西から）



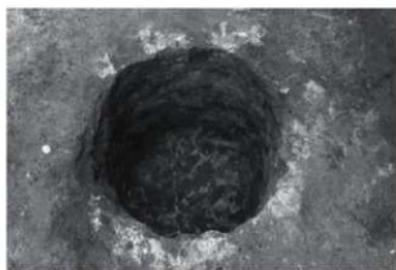
2区 H-28号住居跡全景（西から）



2区 H-30~37号住居跡全景（南西から）



2区 W-1号溝跡全景（南西から）



2区 D-8号土坑全景（西から）



2区 D-8号土坑銅鏡出土状況（西から）



2区 D-8号土坑銅鏡出土状況（西から）



2区 D-8号土坑鉄鎗出土状況（西から）



2区 基本層序A（南から）



2区 H基本層序B（西から）

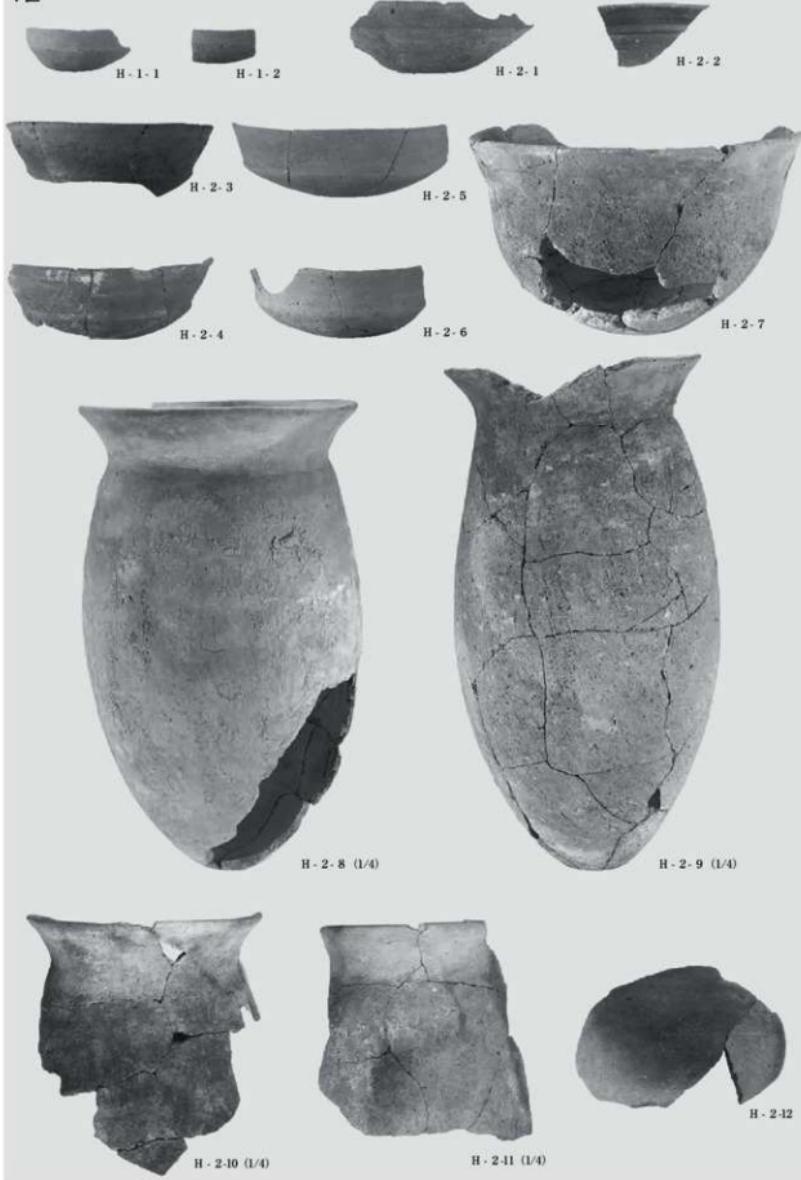


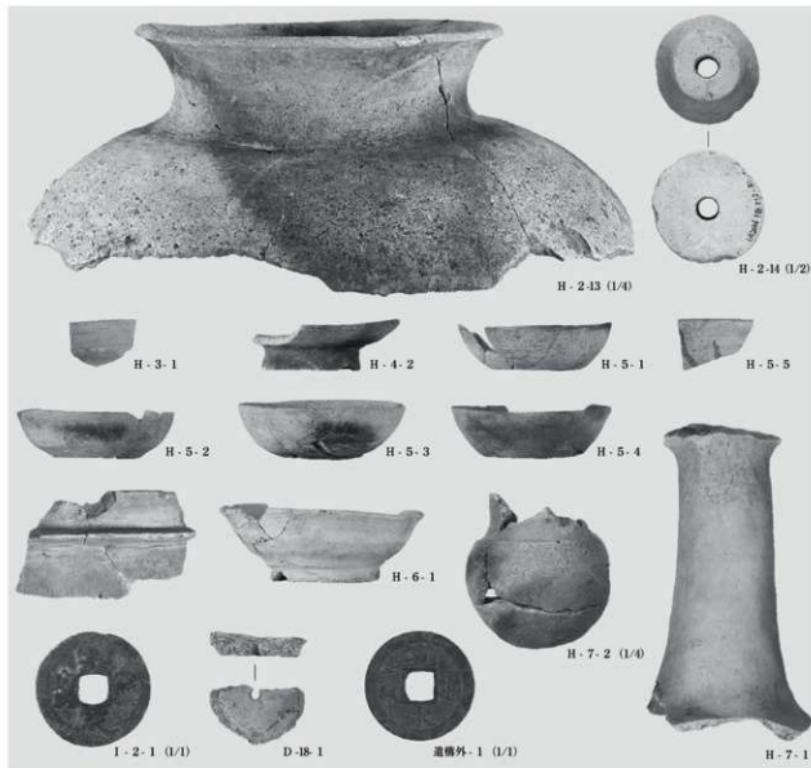
2区 基本層序C（西から）



2区 基本層序D（東から）

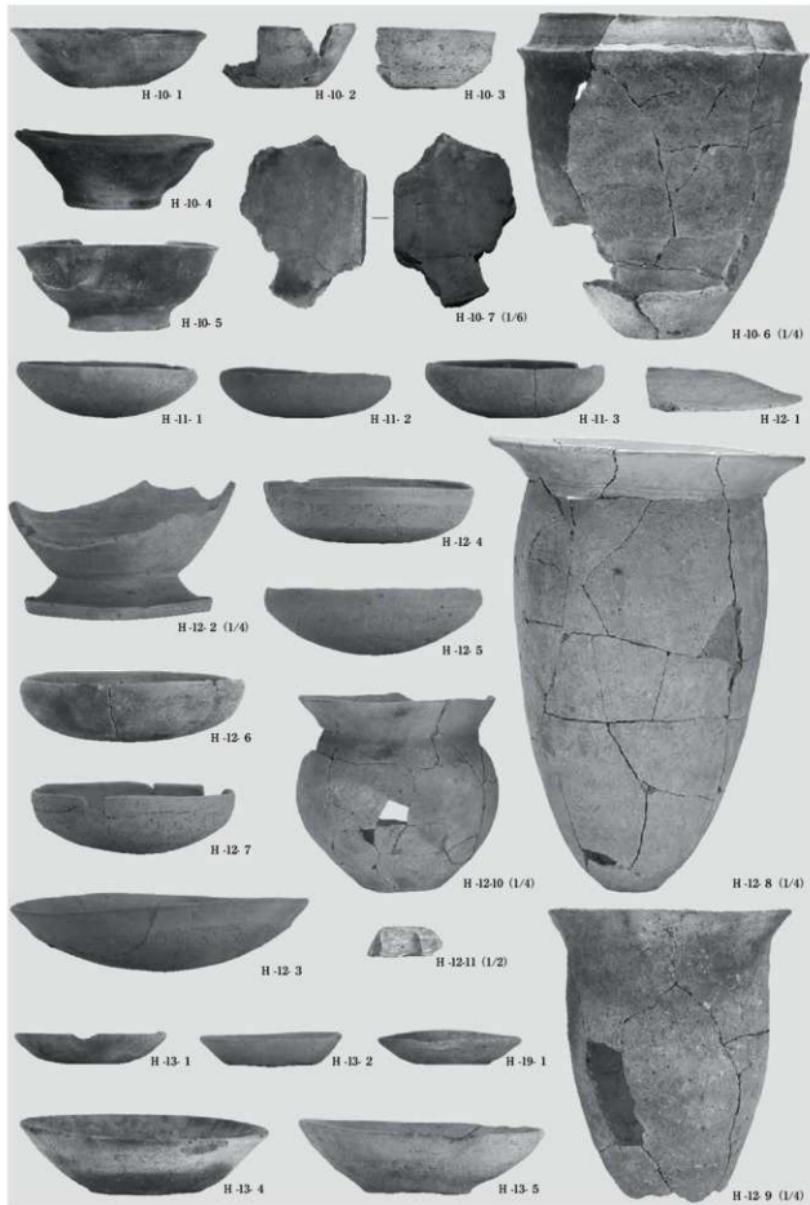
1区

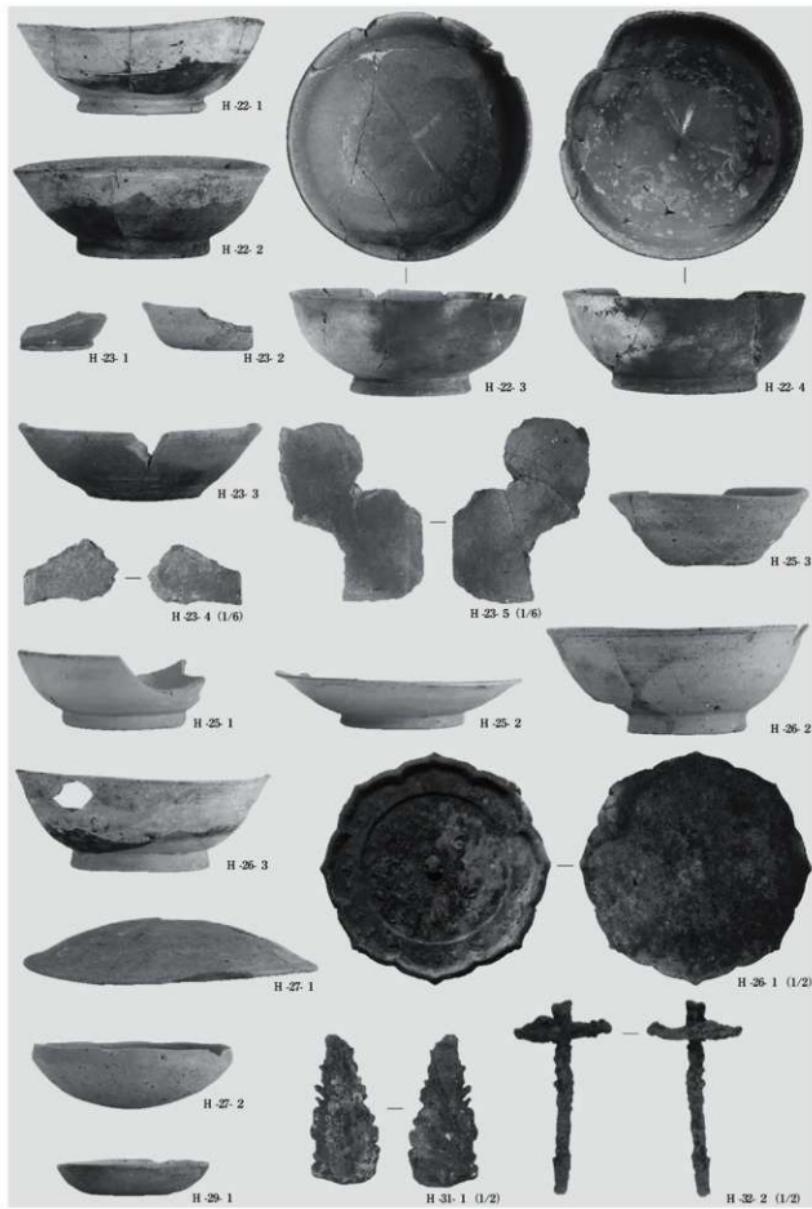


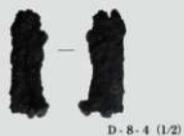


2区









報告書抄録

フリガナ	モトソウジャオウミイセキグン (137)
書名	元総社蒼海遺跡群 (137)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	山田誠司・茂木佑輔
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1丁目15番地3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番地4
発行年月日	2020年3月27日

所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	位置		調査期間	調査面積	調査原因
				北緯	東経			
元総社蒼海遺跡群 (137)	前橋市元総社町 1986ほか	102021	1 A246	1区 36°23'33"	139°22'	20191205	1区 605m ²	前橋都市計画事業 元総社蒼海上地区 埋蔵文化財
				2区 36°23'24"	139°1'48"	20200213	2区 854m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
元総社蒼海遺跡群 (137)	1区 集落	古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	住居跡 溝跡 井戸跡 土坑 ピット	8軒 1条 2基 19基 27基	須恵器 土師器 陶磁器 石製品	・6世紀末～10世紀にわたる 住居跡。
	2区 集落 城館跡	奈良・平安時代 中・近世	住居跡 溝跡 豊穴状造構 井戸跡 土坑 ピット	37軒 5条 1基 1基 19基 27基	須恵器 土師器 銅製品 鉄製品	・7世紀末～11世紀にわたる 住居跡。 ・3面の銅鏡（八稜鏡、五花鏡、 柰文鏡）。 ・蒼海城の堀跡。

元総社蒼海遺跡群 (137)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年3月10日 印刷

2020年3月27日 発行

発行 前橋市教育委員会文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番地4
TEL 027-280-6511

編集技研コンサル株式会社

印刷朝日印刷工業株式会社

